

南地心中

泉鏡花

青空文庫

「今のは、」

初はつぎ阪かもの赤あか毛げ布つと、ところという処を、十月の半ば過ぎ、小春こはるな

風ぎで、ちと逆の上ぼせるほどな暖かさに、下着さえ襲かさねて重し、野

暮しまな縞しまも隠されず、頬ほ被おりかぶりがわりの烏打帽で、朝から見物に出

掛けた……この初阪とは、伝え聞く、富士、浅間、大山、筑波つくば、

はじめて、出立いでたつを初山とこなと称なうるに倣ならつて、大阪の地へ初見参ういけんさん

という意味である。

その男が、天満橋てんまばしを北へ渡越した処で、同伴つれのものに聞いた。

「今のは？」

「大阪城でございますさ。」

と片頬かたほ笑みでわざと云う。結城ゆうぎの藍微塵あいみじんの一枚着、唐棧柄とうざんがら

の袷羽織あわせばおり、茶献上博多けんじょうはかたの帯をぐいと緊めし、白柔皮しろなめしの緒の

雪駄穿せつたばきで、髪をすつきりと刈った、気の利いた若いもの、風俗

は一目で知れる……俳優やくしや部屋の男衆おとこしゆで、初阪ものには不似

合な伝法。

「まさか、天満の橋の上から、淀川よどがわを控えて、城を見て——当

人寝が足りない処へ、こう照てりつけられて、道頓堀どうとんぼりから千日前、

この辺にえの沸にえくり返る町の中を見物だから、茫ぼうとなつて、夢を見た

ようだけれど、それだつて、大阪に居る事は確たしかに承知の上です——

「言わなくつても大阪城だけは分ろうじやないか。」

「御道理ごもつともで、ふふふ、」

男衆はまた笑いながら、

「ですがね、欄干へ立つて、淀川堤を御覧なされると、あなた貴方、うつと恍りとおんなさいましたぜ。じつ熟と考え込んでおしまいなすつて、何かお話しするのもお気の毒なような御様子ですから、私も黙だんまりでね。ええ、……時間の都合で、そちらへは廻らないまでも、網島の見当は御案内をしろつて、親方に吩咐いいつかつて参つたんで、あすこで一ツ、桜宮から網島を口上で申し上げようと思つていたのに、あんまり腕組をなすつたんで、いや、案内者、大きに水を見て涼みました。

それから、ずっと黙りで、橋を渡った処で、（今のは、）とお尋ねなさるんでさ、義理にも大阪城、と申さないじゃ、第一日本一の名城に対して、ははは、」ともものありげにちよつと顔を見る。

初阪は鳥打の庇ひさしに手を当て、

「分りましたよ。真田幸村さなだゆきむらに対しても、決して粗略には存じま

せん。萌黄色もえぎいろの海のような、音に聞いた淀川が、大阪を真ま一つふた

つに分けたように悠揚ゆつくり流れる。

電車の塵ちりも冬空です……澄透すみとおった空に晃々きらきらと太陽が照って、

五月頃うしおの潮が押寄せるかと思う人通りの激しい中を、薄い霧一筋、

岸から離れて、さながら、東海道で富士を視ながめるように、あの、

城が見えたつけ。

川蒸汽の、ばらばらと川浪を蹴けるのなんぞは、高たかやぐら櫓の瓦かわら一枚浮かしたほどにも思われず、……船に掛けた白帆くらいは、城の壁の映るのから見れば、些ささい細な塵です。

その、空に浮出したような、水に沈んだような、そして幻のような、そうかと思うと、歴ありあり然と、ああ、あれが、嬰あかんぼ児の時から桃太郎と一所にお馴染なじみの城か、と思つて見ていると、城のその屋根の上へ、山も見えぬのに、鶴ねえが乗つて来そうな雲が、真まつくろ黒な壁で上から圧おしつ附けるばかり、鉛とを熔かして、むらむらと湧わきかか懸かつて来たろうではないか。」

初阪は意気を込めて、杖ステッキをわきに挟んで云つた。

二

七筋ばかり、工場の呼吸いきであろう、黒煙くろけむりが、こう、風がな
いから、真直まっすぐに立騰たちつて、城の櫓やぐらの棟を巻いて、その蔽おおい
被ぶきった暗い雲の中で、末が乱れて、むらむらと崩立くずれたつて、倒さかさま
に高く淀川の空へ靡なびく。……

なびくに脈を打って、七筋ながら、処々ところどころ、斜めに太陽の光
を浴びつつ、白泡立うずまてて渦うずいた、その凄すごかった事と云つたら。

天守の千畳敷へ打込んだ、関東勢の大砲おおづつが炎を吐いて転がる
中に、淀君をはじめ、夥多あまたの美人の、練衣ねりぎぬ、紅の袴はかまが寸断ずたずた
に、城と一所に滅ぶる景色が、目に見える。……雲を貫く、工場

の太い煙は、丈に余る黒髪が、纏もつれて乱れるよう、そして、倒さかさまに立つたのは、長とこしえに消えぬ人々の怨恨うらみと見えた。

大河おおかわの両岸りょうぎしは、細い樹の枝に、薄紫もやの靄もやが、すらすら。

蒼空あおぞらの下を、矢輻やぼねの晁きらきら々と光る車が、駈かけてもいたのに、：

：水には帆の影も澄んだのに、：：：どうしてその時、大阪城の空ばかり暗澹あんたんとして曇つたろう。

「ああ、あの雲だ。」

と初阪は橋の北詰に、ひしひしと並んだ商人家あきんどやの、軒の看板に隠れた城の櫓やぐらの、今は雲ばかりを、フト仰いだ。

が、俯向うつむいて、足許あしもとに、二人連立つ影を見た。

「大丈夫だろうかね。」

「雷様ですか。」

男衆は逸早く心得て、

「串戯じゃありませんぜ。何の今時……」

「そんなら可いが、」

歩行出す、と暗くなり掛けた影法師も、烈しい人脚の塵に消え

て、天満筋の真昼間。

初阪は晴やかな顔をした。

「凄かったよ、私は。……その癖、この陽気だから、自然と淀川

の水気が立つ、陽炎のようなものが、ひらひらと、それが櫓の

面へかかると、何となく、※と美しい幻が添って、城の名を天下

に彩っているように思われたっけ。その花やかな中にも、しかし、

長い、濃い、黒髪が潜ひそんで、滝のように動いていた。」

城を語る時、初阪の色酔あやぶえるがごとく、土地馴なれぬ足許は、ふらつくばかり危あやぶまれたが、対あいて手が、しやんと来いの男衆だけ、確たしかに引受ひきうけられた酔よつぱらい漢かんに似て、擦す合い、行違いう人の中を、傍わきめ目めも触ふらず饒舌しゃべるのであった。

「時に、それについて、」

「あの、別べつびん嬪びんの事でしょう。私たちが立停たちどまって、お城を見ていました。四五間さきの所に、美しく立たって、同じ方を視ながめていた、あれでしょう。……貴方あなたが（今のは！）ツて一件は。それ、奴やつこを一人、お供お供に連れて、」

「奴を……十五六の小間使だぜ。」

「当地じや、奴ツてそう言います。島田鬻まげに白丈長しろたけながをピンと刎はねた、小凜こりり々しい。お約束でね、御寮人には附きものの小女こおんなですよ。あれで御寮人の鬻まげが、元禄だつた日にや、菱川ひしかわ師宣もろのぶえがく、というんですね。

何だろう、とお尋ねなさるのは承知の上でさ、……また、今のを御覧なすつて、お聞きなさらないじや、大阪うらが怨うらみます。」

「人が悪いな、この人は。それまで心得こころえでいて、はぐらかすんだから。（大阪城でございます、）はちと癩しやくだろうじやないか。」

「はははは。」

「しかし縁なのない事はない。そうして、熟じつとあの、煙けむりの中の凄すこい櫓うらを視ながめていると、どうだろう。」

四五間前さきに、上品な絵の具の薄彩色うすさいしきで、イんでいた、今の、その美人の姿だがね、……淀川の流れに引かれた、私の目のせいなんだろう。すつと向うに浮いて行って、遠くの、あの、城の壁の、矢狭間やざまとも思う窓から、顔を出して、こつちを覗のぞいた。そう見えた。いつの間にか、城の中へ入って、向直つて。……黒雲の下、煙の中で、凄いの、美しいの、と云つて、そりやなかつた。」

三

「だから、何だか容易ならん事が起つた、と思つて、……口惜くやし

いが聞くんです。

実はね、昨夜、ゆうべ中座を見物した時、すぐ隣りのさじき棧敷に居たんだよ、今の婦人は……」とうなず頷くようにして初阪は云う。

男衆はまた笑った。

「ですとも。それを知らん顔で、しらばっくれて、ただいまいちげん唯今一見
という顔をなさるから、はぐらかして上げましたんでさ。」

「だって、すみよし住吉、天王寺も見ない前さきから、大阪へ着いて早々、

あの婦おんなは？ でもあるまいと思う。それじゃ慌て過ぎて、振袖にけつまず躓いて転ぶようだから、やせがまん瘦我慢でだんまり黙然でいたんだ。」

「ところが、辛抱が仕切れなくなつたでしょう、ごもつともですとも。親方もね、実は、お景物にお目に掛ける、ちようど可いか

らツて、わざと昨夜も、貴方を隣棧敷へ御案内申したんです。

附込みでね、旦那と来ていました。取巻きに六七人芸妓が附いて。」

男衆の顔を見て、

「はあ、すると堅気かい、……以前はとにかく、」

また男衆は、こう聞かれるのを合点したらしく頷くのであつた。

「貴方、当時また南新地から出ているんです。……いいえ、旦那が變つたんでも、手が切れたのでもありません。やっぱり昨夜御覧なすつた、あれが元からの旦那でね。ええ、しかも、ついこの四五日前まで、久しく引かされて、桜の宮の片辺かたほとりというのに、

それこそ一枚絵になりそうな御寮人で居たんですがね。あの旦那の飛んだもの好ずきから、洒落しやれにまた鑑札を請けて、以前のままの、お珊さんという名で、新しく披露ひろめをしました。」と質実じみに話す。

「阪地かみがたは風流だね、洒落に芸者に出すなんざ、悟つたもんですぜ、根こぎで手活ていけにした花を、人助けのため拝ませる、という寸法だろう。私なんぞも、お庇かげで土産にありついたという訳だ。」

「いいえ、隣棧敷の緋ひの毛氈もうせんに頬杖ほおづえや、橋の欄干袖振掛けて、という姿ぐらいではありません。貴方、もつと立派なお土産を御覧なさいませうよ。御覧なさいまし、明日、翌々日あさつての晩は、唯今のお珊の方が、千日前から道頓堀、新地をかけて宝市の練ねりに出て、下げ髪、緋はかまの袴はかまという扮装なりで、八年ぶりで練りますから。」

「ひとこと一言、下げ髪、緋の袴、と云ったのが、目のあたり城の上の雲を見た、初阪の耳を穿うがつて響いた。

「何、下げ髪で、緋の袴？……」

「勿論一人じゃありません——確か十二人、同じ姿で揃って練ります。が、自分の髪を入髪いれげなしに解ときほぐして、その緋の袴と擦れ擦れに丈に余るつてのは、あの婦おんなばかりだと云ったもんです。一度引いて、もうそんなに経たちますけれども、私わつしあ今日も、つい近間で見て驚きました。

苦労も道楽もしたろうのに、雁かりがね金額びたいの生はえぎ際わが、一厘だつて拔上ひがっていませんやね、ねえ。

やっぱり入髪なしを水で解いて、宝市は屋台ぐるみ、象つなを繫つい

で曳ひきましようよ。

旦那もね、市に出して、お珊さんのその姿を、見たり、見せたりしたいばかりに、素晴らしく派手を遣やつて、披露ひろめをしたんだつて評判です。

その市女いちめは、芸妓げいこに限るんです。それも芸なり、容色きりようなり、選拔えりぬきでないと、世話人の方で出しませんから……まず選ばれた婦おんなは、一年中の外聞といったわけです。

その中のお職だ、貴方。何しろ大阪じゃ、浜寺の魚市には、活いきた竜宮あらかわが顕れる、この住吉の宝市には、天人の素足が見えるつて言います。一年中の紋日もんびですから、まあ、是非お目に掛けましよう。

貴方、一目見て立たちすくんで、」

「立すくみは大袈裟おおげさだね、人間きが悪いじゃないか。」

「だって、今でさえ、悚然ぞっとなすつたじやありませんかね。」

四

男衆の浮かせ調子を、初阪はなぜか沈んで聞く。……

「まったくそりや悚然ぞっとしたよ。ひとりでに、あの姿が、城の中へふいと入って、向直って、こつちを見るらしい気がした時は。

黒い煙も、お珊さんか、……その人のために空に被かぶさつたように思つて。

天満の鉄橋は、瀬多の長橋ではないけれども、美濃^{みの}へ帰る旅人に、怪しい手箱を託^{ことづ}けたり、俵藤太^{たわらとうだ}に加勢を頼んだりする人に似たように思つたのだね。

由来、橋の上で出会う綺麗な婦^{おんな}は、すべて凄^{すご}いとしてある。――

――
が、場所によるね……昨夜^{ゆうべ}、隣棧敷^{おんな}で見た時は、同じその人だけれど、今思うと、まるで、違^{おんな}つた婦^{おんな}さ。……君も関東ものだから遠慮なく云うが、阪地^{かみがた おんな}の婦はなぜだろう、生きてるのか、死んでるのか、血というものがあるのか知らん、と近所に居るのも可厭^{いや}なくらい、酷^{ひど}く、さました事があつたんだから……」

「へい、何がございました。やたらに何か食べたんですかい。」

「何、詰つまらんことを……そうじゃない。余りと言えれば見苦しいほど、大入芝居の棧敷だというのに、旦那かね、その連つれの男に、好すきさんまい三昧さんまいにされてたからさ。」

「そこは妾てかけものの悲しさですかね。どうして……当人そんなぐうたらじゃない筈はずです。意地張りもちつと可恐こわいような婦おんなでね。以前、芸妓げいしやで居ました時、北新地きたのしんち、新町しんまち、堀江が、一つ舞台で、芸較げんべを遣やった事があります。その時、南から舞で出ました。もつとも評判な踊手なんです、それでも他場所ほかの姉さんに、ひけを取るまい。……その頃北に一人、向うへ廻まわわして、ちと目に余る、家元随一と云う名取りがあつたもんですから、生命いのちがけに氣を入れて、舞つたのは道成寺どうじょうじ。貴方、そりや近頃の見ものだつ

たと評判しました。

能がかりか、何か、白の鱗うろこの膚はだぬ脱だぎで、あの髪かみを颯さつと乱して、ト撞しゅもく木こを被かぶつて、供養の鐘を出た時は、何となく舞台が暗くなつて、それで振袖の襦じゆばん袷あじを透すいて、お珊さんさんの真ま白しろな胸むねが、銀色ぎんいろに蒼あおみ味みがかって光あつたつて騒さわぎです。

そのかわり、火のように舞い澄すみまして楽屋へ入ると、氣を取詰めて、ぼったり倒れた。後見ごみが、回生きつ剤ざいを吞くまそうと首くびを抱かかく。一人が、装束の襟えりを寛くわげようと、あの人の胸むねを開ひらけたかと思うと、キヤツと云つて尻持しりもちをついたはどうです。

鳩みずおち尾びを緊しめた白羽しろはぶ二重にじゅうの腹卷はらまきの中なかへ、生なま々なまとした、長いのが一尾ぴき、蛇へびですよ。畝うね々うねと卷ま込こめてあつた、そいつが、のツそ

り、」と慌あわただしい懷手、黒八丈を襲かきねた襟から、拇おやゆび指を出して、ぎつくり、と蝮まむしを拵こさえて、肩をぶるぶると遣ひっこつて引込ひっこませて、

「鎌首を出したはどうです、いや聞いても恐れる。」とばたばたと袖はたを払はたく。

初阪もそれはしかねない婦おんなと見た。

「執念の深いもんだから、あやかる気で、生命いのちがけの膚はだに絡まとつたというわけだ。」

「それもあります。ですがね、心願も懸なげけたんですとさ。何でも願かなが叶なうと云いいます……呪のろい詛いも、恋なげも、情なげも、慾よくも、意地張いぢぢも同じ事こと。……その時鳩みずおち尾おちに巻まいていたのは、高津辺こうづべの蛇屋へびやで売うります……大瓶おおがめの中にぞろぞろ、という一件いっけんもので、貴方御存あなたごぞんじ

ですか。」

初阪は出所を聞くと悚然ぞつとした。我知らず声を潜ひそめて、

「知ツてる……生紙きがみの紙かんぷくろ袋の口を結えて、中に筋張った動脈やっのようにのたくる奴を買って帰って、一晩内に寝かしてそれから高津の宮裏の穴へ放すんだってね。」

五

「ええ、そうですよ。その時、願ねがいごと事を、思込んで言聞かせます。そして袋の口を解ほどくと、によるによると這出はいだするのが、きつと一度、目の前でとぐろを巻いて、首を擡もたげて、その人間の顔を熟じつ

と視^みて、それから横穴へ入つて隠れるつて言います。

そのくらしい念の入^いつた長虫ですから、買手が来て、蛇屋が貯えたその大瓶^{おおがめ}の圧蓋^{おしふた}を外すと、何ですとさ。黒焼の註文の時だと、うじやうじや我^{われいち}一に下へ潜つて、瓶の口がぐつと透く。：放される客の時だと、ぬらぬら争つて頭を上げて、瓶から煙が立つようですつて、……もし、不気味ですnee。」

初阪は背後^{うしろ}ざまに仰向^{あおもむ}いて空を見た。時に、城の雲は、賑^{にぎや}かな町に立つ埃^{ほこり}よりも薄かつた。

思懸^{おもいが}けず、何の広告か、屋根一杯に大きな布袋^{ほてい}の絵があつて、下から見上げたものの、さながら唐子^{からこ}めくのに、思わず苦笑したが、

「昨日もその話を聞きながら、兵庫の港、淡路島、煙突の煙でない処は残らず屋根ばかりの、大阪を一目に見渡す、高津の宮の高台から……湯島の女坂に似た石の段壇を下りて、それから黒焼屋の前を通つた時は、軒から真黒な氷柱が下つてるように見えて冷りとしたよ。一時に寒くなつて——たださえ沸上り湧立つてる大阪が、あのまた境内に、おでん屋、てんぷら屋、煎豆屋、とかつかつぐらぐらと、煮立て、蒸立て、焼立て、それが天火に曝さらされているんだからね——びっしより汗になつたのが、お庇かげですつかり冷くなつた。但し余り結構なお庇ではないのさ。

大阪へ来てから、お天気続きだし、夜は万燈の中に居る気持だし、何しろ暗いと思つたのは、町を歩ある行く時でも、寝る時でも、

黒焼屋の前を通つた時と、今しがた城の雲を見たばかりさ。」

男衆は偶ふとことば言を挟んで、

「何を御覧なさる。」

「いいえね、今擦違つた、それ、」

とちよつと振向きながら、

「それ、あの、忠兵衛の養母おふくろといつた隠居さんが、紙袋かんぶくろを

提げているから、」

「串じょうだん戯ごじゃありません。」

「私は例のかと思つた、……」

「ありや天満かめの亀こせんべいの子煎餅せんべい、……成程亀屋の隠居でしょう。誰

が、貴方、あんな婆さんが禁厭まじないの蛇へびなんぞを、」

「ははあ、少わかいものでなくっちゃ、利かないかね。」

「そりや……色恋の方ですけれど……慾よくの方となると、無差別ですから、老としより年はなお烈しいかも知れません。」

分けてこの二三日は、黒焼屋の蛇が売れ盛るって言います……
誓せいもんばらい文ぶん払はらいで、大阪中の呉服屋が、年に一度の大見切売をします
んでね、市中もこの通りまた別にぎわして賑にぎわいますさ。

心齋橋筋の大丸なんかでは、景物の福引に十両二十両という品
ものを発は奮ずんで出しますんで、一番引当てようりようけん了り簡けんで、禁まじな
厭いに蛇の袋をぶら下げて、杖を支ついて、お十夜という形で、夜
中に霜を踏んで、白髪しらがで橋を渡る婆さんもあるにやあるんで。」

六

男衆もちよつと町中まちなかをみまわした。

「まったくかも知れませんが、何しろ、この誓文払の前後に、何千条すじですかね、黒焼屋の瓶かめが空虚からになった事があるって言いますから。慾おそろは可恐おそろしい。悪くすると、ぶら提げてるのに打撞ぶつからないとも限りませんよ。」

「それ！ だから云わない事じゃない。」

内端うちわながら二ツ三ツ杖ステッキを掉ふつて、

「それでなくってさえ、こう見渡した大阪の町は、通とおも路地りも、

どの家も、かつと陽気あかるに明い中に、どこか一個所、陰気な暗い処

が潜ひそんで、礼儀作法も、由緒因縁も、先祖の位牌いはいも、色も恋も罪も報むくいも、三世相一冊と、今の蛇一足いちすくずつは、主ぬしになつて隠れてい
 そうな気がする処へ、蛇瓶へびびんの話わたりごとを昨日きのう聞いて、まざまざと爪立つまだち
 足あしで、黒焼屋くろやきの前まえを通つてからというものは、うっかりすると、
 新造しんぞうも年増としぞうも、何か下搔したがいの棲つまあたりに、一条ひとすじ心得こころえていそうで
 ならない。

昨夜ゆうべも、芝居しばいで……」

男衆おとこは思出したおもひだしたように、如才よこしまなく一ツ手を拍うつた。

「時に、どうしたと云うんですえ、お珊さんさんが、その旦那だんなと？……」

「まあ、お聞き——隣合りんあつた私のわが棧敷せきに、髪かみを桃割ももわれに結むすつて、

緋の半襟で、黒くろじゆす縺子の襟を掛けた、黄の勝った八丈といった柄の着もの、つむぎ紬か何か、かすり緋の羽織をふつくりと着た。ふさふさかんざしの簪を前のめりに挿して、それは人柄な、目の涼しい、眉の優しい、くちもと口許すなおの柔順な、まだ肩揚げをした、十六七の娘が、一人入つていたろう。……出来るだけおつくりをしたろうが、着ものも帯も、余りいい家うちの娘じゃないらしいのが、
 「居ました。へい、親方が、貴方に差上げた棧敷ですから、人に入る訳はないが、と云つて、私が伺いましたつけ。貴方が、（構いやしない。と仰おっしゃ有るし、そこはね、大したお目触りのものではなし……あの通りの大入で、ちよつと退どけようツて空場あなも見つからないものですから、それなりでお邪魔を願ツておきました。

後で聞きますと、出方が、しんせつに、まあ、喜ばせてやろう
ツて、内々で入れたんだそうで。ありや何ですツて、逢阪下の
辻——ええ、天王寺に行く道です。公園寄の辻に、屋台にちよつ
と毛の生えたくらいの小さな店で、あんころ餅を売っている娘だ
そうです。いい娘ですね。」

それは初阪がはじめて聞く。

「そう、餅屋の姉さんかい……そして何だぜ、あの芝居の廁に番
をしている、爺さんね、大どんつくを着た逞しい親仁だが、影法
師のように見える、太く、よぼけた、」

「ええ、駕籠伝、駕籠屋の伝五郎ツて、新地の駕籠屋で、ありや
その昔鳴らした男です。もう年紀の上に、身体を投げた無理が出

て、便所の番をしています。その伝が？」

「娘の、爺さんか父親おやじなんだ。」

これは男衆が知らなかった。

「へい、」

「知らないのかい。」

「そうかも知れませんが、私わつしあ御存じの土地とちっこ児じやないんですから、

見たり、聞いたり、透すきぎれ切だらけで。へい、どうして、貴方？」

「ところが分った事がある。……何しろ、私が、昨夜ゆうべ、あの棧敷

へ入った時、空いていた場所は、その私の処と、隣りに一間ひとま、」

「そうですよ。」

「その二間しかなかったんだ。二丁がカチと入った時さ。娘を連

れて、年配の出方が一人、横手の通とおりの、竹格子だね、中座のは。
 ……扉ひらきをツイと押して、出て来て、小さくなつて、背後うしろの廊下、
 お極きまりだ、この処へ立つ事無用。あすこへ顔だけ出して踞しゃがんだも
 んです。（旦那、この娘こを一人願われませんでござりましようか。
 内うち々々のもので、客ではござりません。お部屋へ知れますと悪う
 ござりますが、貴下あなたさま様 思おぼしめし 召めしで、）と至つて慇いんぎん懃めいです。
 資本もとでは懸かからず、こういう時、おのぼりの気前を見せるんだ、と
 思つたから、さあさあ御遠慮なく、で、まず引受けたんだね。」

「ずっと前へお出なさい、と云つて勧めても、隅の口に遠慮して、膝に両袖を重ねて、溢こぼれる八ツ口の、綺麗な友染ゆうぜんを、袂たもとへ、手と一所に推おしこ込んで、肩を落して坐つていたがね、……可愛らしいじゃないか。赤い紐ひもを緊しめて、雪輪ゆきりんに紅梅模様の前まえ垂たれがけです。それでも、幕が開いて芝居に身が入いつて来ると、身体からだをもじもじ、膝を立てて伸上のびあつて——背後うしろに引ひ込んでいるんだから見辛いさね——そうしちや、舞台を覗のぞ込きこむようにしていたつけ。つい、知らず知らず乗出して、仕切にひつたりと胸を附けると、人いきれに、ほんのりと瞼まぶたを染めて、ほつとなつたのが、景気提灯けいきちようちんの下で、こう、私とまず顔を並べた。おのぼり心うちの中に惟おもえらく、光栄なるかな。

まあ、お聞きつたら。

そりや可よかつたが、一件だ。」

「一件と……おつしやると？」

「長いの、長いの。」

「その娘こが、蛇を……嘘うそでしょう。」

「間違つたに違ちがいない。けれども高津で聞いて、平家の水鳥で居たんだからね。幕まく間あいにちよいと楽屋へ立違つて、またもとの所へ入ろうとすると、その娘の袂たもとの傍わきに、紙かん袋ぶくろが一つ出ています。

並んで坐ると、それがちようど膝ひざになろうというんだから、大おおいに怯ひるんだ。どうやら気のせいひるか、むくむく動きそうに見えるじや

ないか。

で、私は後へ引退ひききぎった。ト娘の挿かんざしした簪かんざしのひらひらする、美しい総越ふさぎしに舞台の見えるのが、花輪で額縁を取ったよう、それも可よしさ。

所へ、さらさらどかどかです。荒いのと柔やわらかなのと、急ぐのと、入乱れた蹠あしあと音を立てて、七八人。小袖幕で囲おんなったような婦おんなの中おんなから、赫かつと真赤まっかな顔をして、瘦やせた酒顛しゅてん童子どうじという、三分刈りの頭で、頬骨の張あった、目のぎよろりとした、なぜか額の暗あい、殺気立あった男が、詰襟あの紺の洋服で、靴足袋を長く露あらわした服筒ずぼんをひざがしら膝ひざ頭あたまにたくし上げた、という妙な扮装なりで、その婦おんなたち、鈍太郎殿の手車から転まがり出したように、ぬつと発奮はずんで出て、どし

んと、音を立てて躍おどりこ込んだのが、隣の棧敷で……

唐突いきなり、横のめりに両足を投出すと、痛いほど、前の仕切にがんと支ついた肱ひじへ、頭を乗せて、自分で頸くびを掴つかんでも、そのまま仰あ向けおもむにぐたりとなる、可いいかね。

顔へ花火のように提灯の色がぶツかります。天井と舞台を等分に睨にらみ着けて、（何じやい！）と一つ怒ど鳴る、と思うと、かつと云う大酒の息を吐きながら、（こら、入らんか、）と喚わめいたんだ。背後うしろに、島田やら、銀杏返いちようがえしやら、累かさなつて立たった徒ては、右の旦那よりか、その騒さわぎだから、皆みんなが見返る、見物の方へ氣を兼ねたらしく、顔を見合わせていたつけが。

この一喝くわを啖くらうと、べたべたと、蹴け出だしも袖も崩れて坐まつた。

大切な客と見えて、わか若衆いしゆが一人、女中が二人、前茶屋の
 ろう、附いて来た。人数にんずは六人だったがね。旦那が一杯にのし
 るから、どうして入り切れるもんじやない。随分肥ふとったのも、一
 人ならずさ。

茶屋のがしきりに、小声で詫わびを云つて叩頭おしぎをしたのは、御威勢
 でもこの外に場所は取れません、と詫わびたんだろう。（構いまへ
 んで、お入りなされ。）

「まずい口真似だ、」

初阪は男衆の顔を見て微笑ほほえんだが、

「そう云つて、茶屋の男が、私ことばに言も掛けないで、その中でも、
 なかんずく臀しりの大きな大年増を一人、こつちの場所へ送込んだ。

するとまたその婦おんなが、や、どツこいしよ、と掛声して、澄まして、ぬつと入って、ふわりと裾すそ埃ごみで前へ出て、正面充満いっぱいに陣取つたろう。」

八

「娘はこの肥満ふとつちよ女に、のしのし隅おツつっこへ推着おツつけられて、可恐おそろしく見勝手が悪くなった。ああ、可哀そうにと思う。ちようど、その身体からだが、舞台と私との中垣いじらになったもんだからね。可憐いじらしいじやないか……

そつ密と横顔で振向いて、ふしめ俯目ふしめになつて、あんた（貴下あんたはん、見憎うおま

すやろ、)と云つて、極きまりの悪そうに目をぱちぱちと瞬いたんで
す。何事も思いません。大阪中の詫わびごと言を一人でされた気がした
ぜ。」

男衆は頭つむりを下げた。

「御道理ごもつともで。」

「いや、まったく。心配しないで楽に居て、御覽々と重ねて云
うと、芝居で泣いたなりのしつとりした眉まみえを、嬉しそうに莞爾にっこり
して、向うを向いたが、ちよつと白い指おさで压えながら、その花はな
簪かんざしを抜いたはどうだい。染分そめわけの総ふさだけでも、目障りになるまい
という、しおらしいんだね。」

(酒だ、酒だ。疾はやくせい、のろま!)とぎっくり、と胸を張はり反そら

して、目を剥く。こいつが、どろんと濁つて血走つてら。ぐしゃぐしゃ見上げ皺しわが揉もみ上あがつて筋だらけ。その癖、すぺりと髯ひげのない、まだ三十くらい、若いんです。

（はいはい、たつた今、直じきに、）とひよこひよこ敷居に擦附ける、若衆は叩頭おしぎをしいしい、（御寮人様、行届きまへん処は、何分、）と、こう内証で云つた。

その御寮人と云われた、……旦那の背後うしろに、……髪はやつぱり银杏返しだっけ……お召の半コオトを着たなりで控えたのが、

「へい、成程、背後うしろに居ました。」

「お珊かたの方かね、天満橋で見た先刻さつきのだ。もつとも東の雛壇ひなだんをずらりと通して、柳桜が、色と姿を競つた中にも、ちよつとはあ

るまいと思う、容色きりようは容色と見たけれども、齒痒はがゆいほど意氣地いくじのない、何て腑ふの抜けた、と今日より十段も見劣りがしたつて訳は……

いずれ妾めかけだろう。慰まれものには違いないが、若い衆も、(御寮人、)と奉つて、何分、旦那を頼む、と云う。

取巻きの芸妓げいしやたち、三人五人の手前もある。やけに土砂を振掛けても、突つツぱり張返つた洋服の亡者ひとり一個、掌ひらに引丸ひんまるげて、捌さばきを附けなけりや立ちますまい。

ところが不可いけない。その騒ぐ事、暴れる事、棧敷へ狼を飼つたやうです。(泣くな、わい等、)と喚わめく——君の親方が立女形たておやまで満場水を打つたやう、千百の見物が、目も口も頭も肩も、幅の広

いただ一人にんの形になつて、噉すすり泣きの声ばかり、誰が持った手ハンケ
 巾チも、夜会草の花を昼間見るように、ぐつしより萎しほんで、火影
 の映るのが血を絞るような処だつけ——（芝居を見て泣く奴があ
 るものかい、や、怪体けたいな！）

舞台でも何を泣ほえくさるんじやい。かつと喧嘩けんかを遣れ、面白
 ないぞ！ 打たたき殺ころして見せてくれ。やい、腸はらわたを掴つかみだ
 せ、へん、

馬鹿ばかな、とニヤリと笑う。いや、そのね、ニヤリと北叟ほくそえ笑みを
 する凄すげさと云つたら。……待てよ、この御寮人が内証ないしよで情人いろを
 こしらえる。嫉妬しつとでその妾はらわたの腸ひきずを引摺り出す時、きつと、そんな
 笑い方をする男に相違ないと思つた。

可哀あわれを留とどめたのは取巻連さ。

夢中になつて、芝居を見ながら、旦那が喚くたびに、はつとす
 るそうで、皆が申合わせた形で、ふらりと手を挙げる。……片手
 をだよ。……こりや、私の前を塞いだ肥満女も同じく遣つた。

その癖、黙然でね、チトもしお静に、とも言い得ない。

すると、旦那です……（馬鹿め、止めちまえ、）と言いなながら、

片手づきの反身の肩を、御寮人さ、そのお珊の方の胸の処へ突つ

けて、ぐたりとなつた。……右の片手を逆に伸して、引合せたコ

オトの襟を引搦んで、何か、自分の胸が窮屈そうに、こう蹴い

て、引開けようとしたんだがね、思う通りにならなかつたもん

だから、（ええ）と云うと、かど開けた、細い黄金鎖が晃然と

光る。帯を掴んで、ぐい、と引いて、婦の膝を、洋服の尻へ搔込

んだりと思うと、もろに凭もたれ懸かった奴が、ずるずると這すべつて、それなり真仰まあおむ向けさ。傍若無人だ。」

九

「膝枕をしたもんです。その野分のわきに、衣紋えもんが崩れて、褌つまが乱れた。旦那の頭は下搔したがいの褌ゆばんを裂いた体に、紅入友染べにいりゆうぜんの、膝ながの長がじ襦袢ゆばんにのめずって、靴足袋をぬいと二ツ、仕切を空へ突出したと思え。」

大蛇いびきのような躰かを搔かく。……妾めかけはいいなぶりものにされたじゃないか。私は浅ましいと思った。大入の芝居の棧敷で。

江戸兎だと、見たが可い！ 野郎がそんな不状をすると、それが情人なら簪でも刺殺す……金子で売った身体だったら、思切つて、衝と立って、袖を払って帰るんだ。

処を、どうです。それなりに身を任せて、静として、しかも入身に娜々としているじゃないか。

掴寄せられた帯も弛んで、結び目のずりりと下った、扱帯の浅葱は冷たそうに、提灯の明を引いて、寂しく婦の姿を庇う。それがせめてもの思遣りに見えたけれども、それさえ、そうした度の過ぎた酒と色に血の荒びた、神経のとげとげした、狼の手で掴出された、青光のする腸のように見えて、あわれに無慚な光景だっけ。」

「……へい、そうですね。」と云つた男衆の声は、なぜか腑ふに落ちぬらしく聞えたのである。

「聞きや、道成寺を舞つた時、腹巻の下へ蛇を緊しめた姉さんだと云うじゃないか。……その扱しご帯きが鎌首もたを擡もげりや可よかつたのにさ。」

「まったくですよ。それがために、貴方ね、舞の師匠から、その道成寺、葵あおいの上などという執しゅう着ぢやくの深いものは、立たち方かた禁制きんせいと言渡ことされて、破門だけは免れたツて、奥行きのある婦おんなですが……金子かねの力で、旦那にや自由にならないじやありませんまいよ。」

「気の毒だね。」

「とおつしやると、筋も骨も抜けたように聞えますけれど、その

癖、随分、したい三昧さんまい、我儘わがままを、するのを、旦那の方で制し切れないツて、評判をしますがね。」

「金子でその我ままをさせてもらうだけに、また旦那にも棧敷で帯を解かれるような我儘をされるんです。身体からだを売つて栄耀えいよう栄華さ、それが浅ましいと云うんじゃないか。」

「ですがね、」

と男衆は、雪駄せったちやらちやら、で、日南ひなたの横顔、小首ひねを捻つて、「我儘しなも品しなによりまさ。金剛石ダイヤモンドや黄金鎖きんぐさりなら妾めかけの身じや、我儘しなという申立てにもなりませんかね。」

自動車のプウプウも血の道に触さわるか何かで、ある時なんざやつこ、奴やつこの日傘で、青葉時に、それ女大名の信長公でさ。鳴かずんば鳴か

して見しよう、日中ひなかに時ほととぎす鳥を聞くんだ、という触込みふれこみで、天王寺へ練込みましたさ、貴方。

幫たいこもち間が先へ廻つて、あの五重の塔の天辺てっぺんへ上つて、わなわな震えながら雲雀ひばりづえ笛をパイ、はどうです。

そんな我儘より、もつと偉いのは、しかもその日だつて云うんですがね。

御堂横みどうから蓮はすの池へ廻る広場ひろつば、大銀杏おおいちようの根方むしろに筵むしろを敷いて、すととん、すととん、と太鼓たたを敲たたいて、猿を踊らしていた小僧を、御寮人お珊の方、扇子はんぴらぎを半開はんびらぎか何かで、こう反身で見ると、

(可愛らしいぼんちやな。)で、俳優やくしやの誰にとかに肖にてるツて御意の上……(私は人の妾やよつて、えらい相違もないやろけれど、

畜生に世話になるより、ちつとは優ましや。旦那に頼んで出世させて上げる、来なはれ、と直ぐに貴方。

その場から連れて戻つて、否いやおう応なしに、旦那だんを説とき付けて、たちまち大店おおだなの手代分。大道稼いぎの猿廻しを、縞しまもの揃そろいにきちんと取立てたなんぞはいかがで。私は膝つを突つつ腕うでに、ちつとは実があると思おもうんですが。」

初阪はこれを聞くと、様子が違つて、

「さあ、事だよ！すると、昨夜ゆうべのはその猿廻しだ。」

「いや、黒服の狂犬やまいぬは、まだ妾めかけの膝枕ひざまくらで、ふんぞり返たかいつて高たかいびきびき。それさえ見てはいられないのに、……その手代てしろに違ちがいがない。

……当時の久松ひさむねといつたのが、前垂まえだれがけで、何か急用きんようと見えて、逢あいに來てからの狼藉ろうぜきが、ままつたく目に余あつたんだ。

悪あく口吐くちつくのに、(猿曳さるひきめ、)と云いつたが、それで分わつた。

けけずり廻ましとか、摺古木すりこぎとか、獸けだものめとかいう事ことだろう。大阪おさかでは(猿曳さるひき)と怒鳴どなりるのかと思おもつたが。じゃ、そのお珊さんの方が取立とつた、銀杏いちじょう杏ぎやうの下したの芸人げいじんに疑ういがない。

となると……あの、婦おんなはななお済すまないぜ。

自分の世話よせわをした若手代わかししろが、目の前まへで、額きせを煙管きせるで打ぶたれるのを、もじもじと見ていたろうじゃないか。」

「煙管で、へい？……」

「ああ、垂たらたら々と血が出た。それをどうにもし得ないんだ。じゃ、

天王寺の境内で、猿曳を拾上げたつて何の功にもなりやしない。

まあね、……旦那は寝たろう。取巻けいこきの芸妓一統、互たがいにほつと

したらしい。が、私に言わせりやその徒てあいだつて働はたらきがないじやな

いか。何のための取巻なんです。ここは腕があると、取仕切つて、

御寮人に楽をさせる処さね。その柔かい膝に、友染も露出あらわになる

まで、石頭の拷問ごうもんに掛けて、芝居で泣いていては濟みそうもな

いんだが。

可よしき、それも。

と、そこへ、酒肴さかな、水菓子みづこを添えて運んで来た。するとね、円ま

鬻げに結いつた仲居らしいのが、世話をして、御連中、いずれもお一ツずつは、いい気なもんです。

さすがに、御察人は、頭かぶりをちよつと振つて受けなかつた。

それにも構わず……（さあ一ツ。）か何かで、美濃みのから近江おうみ、

こちらの棧敷あふに溢あれてる大きなお臀しりを、隣から手を伸のして猪口ちよくの

縁ふちでコトコトと音信おとづれると、片手で簪かんざしを撮つまんで、ごしごしと鬢びんの

毛つツかを突搔つツかき突搔つツかき、ぐしやりと挫ひしやげたように仕切もたに凭もたれて、乗出

して舞台を見い見い、片手を背後うしろへ伸ばして、猪口ひつを引ひつ傾かたむけ

たまま受ける、注つぐ、それ、溢こぼす。（わややな、）と云う。

そいつが、私の胸の前で、手と手を千鳥がけはじめに始はじつたんだから

驚おどくだろう。御免も失礼も、会釈一つするんじゃない。

しかし憎くはなかつたぜ。君の親方が舞台に出ていて、皆が夢
 中で遣る事なんだ。

憎いのは一人狂犬やまいぬさ。

やっと静まつたと思う間もない。

(酒か、)と喚わめくと、むくむくと起おきかかつて、引担ひっかつぐような肱ひじ
 の上へ、妾の膝で頭を載せた。

(注げ! 馬鹿めが、)と猪口を叱つて、茶碗で、苦い顔して、
 がぶがぶと搔かっくら喫くう処へ、……色の白い、ちと纖弱ひよわい、と云つた
 柄さ。中脊の若いのが、縞しまの羽織で、廊下をちよこちよこと来て、
 ト手をちやんと支ついた。

(何や、)と一ツ突慳貪つっけんどんに云つて睨にらみつけたが、低声こごえで、若い

のが何か口上を云うのを、フーフーと鼻で呼吸いきをしながら、目を瞑ねむつて、真仰向けに聞いたもんです。

(旦那の、)旦那と云うんだ。(旦那のここに居るのがどないして知れた、何や、)とまた怒鳴つて、(判然はつきりぬかしおれ。何や？ 番頭が……ふ、ふ、ふん、)と嘲あざけるような、あの、凄すごい笑わらい顔がお。やがて、苦々しそうに、そして切なそうに、眉しかを顰しかめて、唇ひんむすを引結ぶと、グウグウとまた鼻いびきを搔か出す。

いや、しばらく起きない。

若手代は、膝へ手を支たいたなり、中腰でね、こう困こまつたらしく俯うつむ向むいたツきり。女連は、芝居に身いが入こつて言ことばも掛かけず。

その中うちに幕しまが閉しまった。

満場わツと鳴つて、ぎつしり詰つまつたのが、真黒まっくろに両方の廊下へ溢れる。

しばらくして、大分鎮しずまった時だった。幕あきに間もなさそう
で、急いそぎ足あしになる往來ゆききの中を、また竹の扉ひらきからひよいと出たの
は、娘を世話した男衆でね。手に弁当を一つ持っていました。

（はいよ、お弁当、）と云つて、娘に差出して、渡そうとしたっ
けが……」

十一

「そこに私も居る、……知らぬ間に肥満女ふとつちよの込入つたのと、振

向いた娘の顔とを等分に見較べて（和女、極が悪いやろ。そしたら私が方へ来て食りなはるか。ああ、そうしなはれ、）と莞爾々々笑う、気の可い男さ。（太いお邪魔にござります。）と、屈んで私に挨拶して、一人で合点して弁当を持ったまま、ずいと引退った。

娘がね、仕切に手を支くと、向直つて、抜いた花簪を載せている、涙に濡れた、細り畳んだ手拭を置いた、友染の前垂れの膝を浮かして、ちよつと考えるようにしたつけ。その手拭を軽く持って、上氣した襟のあたりを二つ三つ煽きながら、可愛い足袋で、腰を据えて、すつと出て行く。……

私は煙草がなくなつたから、背後の運動場へ買いに出た。

余り見かねたから、背後うしろ向きになつていたがね、出しなに見ると、狂やまいぬ犬はそのまま膝枕で、例の軒で、若い手代はどこへ立つたか居なかつた。

西の運動場には、店が一つしかない。もう幕が開く処、見物は残らず場所へ坐すわりなお直している、ここらは大坂は行儀が可いよ。

それに、大人で、身の入いつた芝居ほど、運動場は寂しいもんです。

風は冷つめたし、呼吸いきぬきかたがた、買った敷島をそこで吸附けて、

喫ふかしながら、堅い薄縁うすべりの板の上を、足袋の裏冷ひやひや々と、快いい

心持で迂すべらして、懐手で、一人で棧敷へ帰つて来ると、斜違はすかいに

薄暗い便所が見えます。

そのね、手水鉢ちようずばちの前に、大おおきな影法師見るように、脚榻きやたつに腰

を掛けて、綿の厚い寝ね寝子ねこで踞くまつてるのが、何だっけ、君が云つた、その伝五郎。」

「ぼけましたよ、ええ、娼婆しやば気げな駕籠屋かろうでした。」

「まったくだね、股引ももひきの裾すそをぐい、と端折はしよつた処ところは豪勢ごうせいだが、下腹げはらがこけて、どんつくの圧おしに打たれて、猫背ねこせにへたへたと滅入めいり込んで、臍へそから頤おとがが生うえたようです。

十四五枚うずたかも、堆うずたかく懐かに畳たたんで持もつた手拭てふきは、汚これてはおらないが、その風かぜだから手拭てふききに出でしてくれるのが、鼻紙はなの配分はいぶんをするようさね、潰つぶれた古無尽ふるむじんの帳面ちやうめんの亡者むしやうにそっくり。

一度、前幕ぜんまくのはじめに行いつて、手てを洗あらつた時とき、そう思おもつた。

小さな銀貨ぎんがを一個握ひとつにぎらせると、両手りやうてで、頭あたまの上うへへ押頂おしいて、

(沢山に難有ありがと、難有、難有、難有、)と懐中ふところへ頤あごを突込んで礼をするのが、何となく、ものの可哀あわれが身に染みた。

その爺さんがね、見ると……その時、角兵衛という風で、頭を動かす……坐睡いねむりか、と思うと悶もがいたんだ。仰向あおむけに反そって、両手の握にぎりこぶし拳こぶしで、肩を敲たたこうとするが、ひツつるばかりで手が動かぬ。

うん、と云う。

や、老としより人の早打肩。危いと思つた時、幕あきの鳴ものが、チヤンと入つて、下座げざの三味線さみせんが、ト手首を口へ取つて、湿しめりをくれたのが、ちらりと見える。

どこか、もの蔭から、はらはらと走つて出たのはその娘で。

突然、爺様の背中へ掴まると、手水鉢の傍に、南天の実の
 撓々と、霜に伏さつた冷い緋鹿子、真白な小腕で、どんつ
 くの肩をたたくじやないか。

青苔の緑 青がぶくぶく禿げた、湿つた貼の香のふんとす
 る、山の書割の立て掛けてある暗い処へ凭懸つて、ああ、さすが
 にここも都だ、としきりに可懐く熟と視た。

そこへ、手水鉢へ来て、手を洗つたのが、若い手代——君が云
 う、その美少年の猿廻。

「急いで手拭を懐中へ突込むと、若手代はそこいらしきりに前後とさきみまわをした、……私は書割の山の陰に潜ひそんでいたろう。

誰も居ないと見定めると、直ぐに、娘をわきへ推遣おしやつて、手代が自分で、爺様じいさんの肩を敲たたき出した。

二人はいい中で居るらしい、一目見て様子で知れる、」

「ほう、」

と唐突だしぬけに声を揚げて、男衆は小溝を一つ向うへ跳んだ。初阪は小さな石橋を渡った時。

「私は旅行たびをした効かいがあると思つた。

声は届かないけれども、趣でよく分る。……両手を働かせながら、若手代は、顔で教えて、ここは可い、自分が介抱するから、

あつちへ行つて芝居を見るように、と勧めるんです。娘が肯かな
 いのを、優しく叱るらしく見えると、あいあいと頷く風でね、老
 年しよりを勤いたわる男の深切を、嬉しそうに、二三度見返りながら、娘は
 いそいそと棧敷へ帰る。その竹の扉ひらきを出る時、ちよつと襟を合せ
 ましたよ。

私も帰つた。

間もなく、何、さしたる事でもなかつたらう。すぐに肩癖けんぺきは
 解ほぐれた、と見えて、若い人は、隣の棧敷際へ戻つて来て、廊下へ
 支つきひざ膝、以前のごとし。……

真中まんなかへ挟はさまつた私を御覧。美しい絹糸で、身体中からだかがられる、
 何だか擦くすぐつたい気持に胸が緊しまつて、妙に窮屈な事といつたらない。

狂^{やまいぬ}犬がむつくり、鼻息を吹直した。

(柿があるか、剥^むけやい、)と涎^{よだれ}で滑^{ぬらぬら}々々した口を切つて、絹も膚^{はだ}にくい込もう、長い間枕した、妾の膝で、真^{まっか}赤な目を睜^{みひら}くと、手代をじろり、さも軽蔑したように見て、(何^{なん}しとる? 汝^{わり}や!)と口汚く、まず怒鳴つた。

(何じや、返事を待った、間抜け。勘定^{ほし}欲しい、と取りに来た金子^{かね}なら、払うてやるは知れた事や。何吐^{ぬか}す。……三百や五百の金。うんも、すんもあるものかい、鼻かんで敲^{たた}きつけろ、と番頭にそ^う吐^ぬかせ。)

(はい、)と、手を支^つく。

(さつさと去^いね、こない場所へのこのこと面出しておつて、何^{なん}さら

す、去ねやい。」

（はい、）とそれでも用済み。前垂の下で手を揉みながら、手代が立って、五足ばかり行きかかると、

（多一、多一、）と呼んだ。若い人は、多一と云うんだ。

（待てい、）と云う。はつと引返して、また手を支くと、婦おんなの膝をはらばいに乗出して、（何じやな、向うから金子かねくれい、と使が来て店で待つじやな。人寄よこ越いたら催促やい。誰や思う、丸官、）と云つたように覚えている。……」

「ええ、丸田官蔵、船場の大金持です。」

「そうかね、（丸官は催促されて金子かね出した覚えはない。へへん、）と云つて、取巻の芸妓げいこ徒の顔をずらりと見渡すと、例すべの凄

いので嘲笑あざわらつて、軍鶏しやもが蹴けつけるように、ポンと起きたが、
 (寄越せ、)で、一人剥むいていた柿ひを引手ひ繰たくる、と仕切ひじに肱ひじを立
 てて、頤あごを、新高しんたかに居いるどこかの島田しま鬚げの上に突出と出して、丸まる
 噛じりに、ぼりぼりと喰くいかきながら、(留やめちまえ、)と舞台うへ
 喚わめく。

御寮人ごしやうは、ぞろりと棲つまを引合ひせる。多一たは、その袖そでの蔭うに、踞く
 っていたんだね。

するとね、くいほじった柿かきの核たねを、びよいびよいと棧敷せき中ちゆうへ吐
 散ちらして、あはは、あはは、と面相めんしやうの崩くれるばかり、大口おを開ひ
 て笑わらったつけ。

(鉄砲打てつぱうて、戦争押お始はじめる。大砲たいぱうでも放はなさんかい、陰気いんきな芝居しばい

や、馬鹿、）と云うと、また急に、険しい、苦い、尖^{とが}った顔をして、じろりと多一を睨^{にら}みつけた。

（何しとる、うむ、）と押潰^{おしつぶ}すように云います。

（それでは、番頭さんに、その通り申聞けますでございませう、）とまた立って、多一が歩^{ある}行き出すと（こら！）と呼んで呼び留めた。

（丁稚^{でっちでっち}々々、）と今度は云うのさ。」

聞く男衆は歎息した。

「難物ですなあ。」

「それからの狂^{やまいぬ}犬が、条^{すじ}理^り違^{ちが}いの難^{やま}題^{だい}といつちや、聞^きいていら
れなかつたぜ。

(汝^{わり}や、はいはいで、用^{もち}を済^すまいた顔^が色^{しよく}で、人^{ひと}間^ま並^{なら}に棧^{せき}敷^し裏^ら

を足^あばかりで立^たつて行^いくが、帰^かつたら番^{ばん}頭^{とう}に何^{なに}と言^いうて返^か事^じさら
すんや。何^{なに}や！ 払^はうな、と俺^{おれ}が吩^い附^いけたからその通^とり申^まします、

と申^ましますが、呆^{おろ}れるわい、これ、払^はうべき金^か子^ねを払^はわいで、主^{しゆ}
人^{ひと}の一分^{いっぺん}が立^たつと思^{おも}うか。(五^ご百^{ひゃく}円^{えん}や三^{さん}百^{ひゃく}円^{えん})と大^おな声^{こゑ}して、

(端^は金^か子^ね、)で、底^{そこ}力^{ちから}を入^いれて塗^ぬりつ^つけるよう^{よう}に声^{こゑ}を密^{ひそ}めて：

：(な、端^は金^か子^ねを、ああもこ^こうもあ^あるもの^{もの}かい。俺^{おれ}が払^はうな、と
言^いうたか^かて払^はえ。さ^さつさ^さと一^{いっ}束^{とく}にし^して突^つ付^けろ。帰^かれ！ 大^お白^{おたわ}

痴け、その位な事が分らんか。）

で、また追立おったてて、立掛ける、とまたしても、（待ちおれ。）
だ。

（分ったか、何、分った、偉い！ 出で来かす、）と云つてね、ふふん、と例いの厭やな笑わらい方かたをして、それ、直ぐに芸妓連げいこれんの顔をぎよろり。

（分つたら言うてみい、帰つて何と返事をする、饒舌しゃべれ。一応は聞いておく。丸官後学のために承りたい、ふん、）と鼻あおむを仰向けに耳を多一に突附けて、そこにありあわせた、御察人きんぎの黄金煙管せるを握つて、立続けに、ふかふか吹かす。

（判はつきり然言え、判然、ちゃんと口上をもつて吐ぬかせ。うん、番頭

に、番頭に、番頭に、何だ、金子を払え？……黙れ！ 沙汰過ぎた青二才、）と可おそろし恐い顔になった。（誰が？）と吠ほえるような声で、（誰が払えと言った。誰が、これ、五百円は大金だぞ！

丸官、たかを聞いてさえぶるぶるする。これ、この通り震えるわい。）で、胴肩を一つに揺ゆすり上げて、（大胆ものめが、土性骨の太い奴や。主人のものだとたかを括くくって、大金を何の糟かすとも思いくさらん、乞食を忘れたか。）

と言う。

目に涙を一杯ためて、（御免下さいまし、）と、退すきつて廊下へ手を支つくと、（あやまるに及ばん、よく、考えて、何と計らうべきか、そこへくい附いて分別して返答せい。……石になるまで、

汝わりや動くな。とまた柿を引手ひつたく繰つて、かつかつと喰いかきながら、（止めやちまえ、馬鹿、）と舞台へ怒鳴る。

（旦那様、旦那様、）多一が震ふるえ声こえで呼んだと思え。

（早いな、汝われがような下根げこんな奴には、三年かかろうと思うた分別が、立たちどころ処は偉い。俺おれを呼ぶからには工夫が着いたな。まず、褒美ほうびを遣る。そりや頂け、）と柿の蒂へたを、色白な多一の頬へたたきつけた。

（もし、御寮人様、）と熟じつと顔を見て、（どうしましたら宜よろしいのでございましょう、）と縋すがるようになして言つたか言わぬに、

（猿さる曳ひきめ、汝われや、婦おんなに、……畜生、）と喚わめくが疾はやいか、伸掛のしかかつて、ピシリと雁首がんくびで額を打ぶつたよ。羅宇らうが真中まんなかから折れた。

こちらの棧敷に居た娘が、誰より先に、ハツと仕切へ顔を伏せる、と氣を打たれたか、驚いた顔をして、新高の、ちようど下に居た一人商人風の男が、中腰に立って上を見た。

芸妓達も一いつとき時に振向いて目を合せた、が、それだけさ。多一おきが压えた手の指から、たらたらと糸すじのように血の流れるのを見たばかり、どうにも手のつけようがなさそうな容子ようすには弱つたね。おまけに知らない振ふりをして、そのまま芝居を見る姉さんがあるじやないか。

私は、ふいと立って、部屋へ帰った。

そば傍に居ちや、もうこつちが撮つまみだ出されるまでも、横よこつら面一ツ打うち
ちひしや挫くずれがなくツては、新橋へ帰られまい。が、私が取組とづくみあ合つた、

となると、随分舞台から飛んで来かねない友だちが一人居るんだからね。

頭痛がする、と楽屋へ横になったツきり、あとの事は知りません。道頓堀で、別に半鐘を打たなかつたから、あれなり、ぐしやぐしやと消えたんだらう。

その婦おんなだ、呆れたぐうたらだと思つたが、「

「もし、もし、」

と男衆が、初阪の袖を、ぐい、と引いた。

十四

歩ある行くともなく話しながらも、男の足は早かった。と見ると、二人から十四五間、真ま直すに見渡す。——狭せまいが、群ぐん集じゆの夥おびしい町筋を、斜やめに奴やつこを連れて帰る——二ふた個つ、前あ後とにすつと並んだ薄色の洋傘こうもりは、大輪の芙蓉ふようの太陽ひを浴びて、冷たく輝くがごとくに見えた。

水打つちった地もに、裳もすその綾あやの影かげも射さす、色いろは四辺あたりを払はつたのである。「やあ、居ゐる……」

と、思わず初阪はつさかが声を立てる、ト両側を詰めた屋かごとの店たな、累かさなり合あつて露店ろてんもあり。軒のきにも、路ぢにも、透すき間まのない人ひと立たちしたが、いずれも言合あせたように、その後姿を見送おくっていたらしいから、一見あかけつと赤毛布あかべつとのその風采ふううで、慌あわただだしく（居ゐる、）と云えば、件くだの婦おんな

に吃驚びつくりした事は、往來ゆききの人の、近間ちかまなものには残らず分つた。

意気いきな案内者おおい大に弱つて、

「驚おどいては不可いけません。天満の青物市です。……それ、眞正まっしやうめ面に、御鳥居を御覧なさい。」

はじめに心付くと、先刻さつきなが視めた城に対して、稜威みいずは高し、宮居みやいの屋根。雲に連なる葺いらかの棟は、玉を刻んだ峰である。

向つて鳥居から町一筋、朝市の濟んだあと、日蔽ひおおいの葭簀よしずを払つた、両側の組柱は、鉄橋の木賃おんなに似て、男も婦も、折いちびから市いちび人の服装ふりは皆黒いのに、一ツ鮮麗あざやかに行く美人ゆの姿のために、さながら、市松障子の屋台いした、菊の花壇きくのごとくに見えた。

「音に聞いた天満の市へ、突いきなり然入つたから驚いたんです。」

「そうでしよう。」

擦違すれちがった人は、初阪もの顔を見て皆笑わらいを含む。

両人ふたりは苦笑した。

「ほっこり、暖あつたかい、暖い。」

蒸ふかし芋いもの湯気の中に、紺の鯉こいづち口した女房が、ぬつくりと立

つて呼ぶ。

「おでんや、おでん！」

「饅頭うげんあがんなはらんか、饅頭。」

「煎餅せんべい買いなはれ、買いなはれ。」

鮭すしの香気かおりが芬ぶんとして、あるが中に、硝子戸越ガラスどごしの紅くれなひは、住吉の浦

の鯛、淡路島の蝦えびであろう。市場の人の紺足袋に、はらはらと散

つた青い菜は、皆天王寺の蕪かぶらと見た。……頬被ほおかむりしたお百姓、空からか籠荷ごにのうて行違ゆきちがう。

軒より高い競売せりもある。

からかさ

傘さした飴屋あめやの前で、

奥深い白木の階きざはしに、

二人まず、帽子を手

に取った時であつた。——前途ゆくてへ、今大鳥居を潜くぐるよと見た、見

る目も彩あやな、お珊の姿が、それまでは、よわよわと氣病きやみの床を小

はるびより

春日和はるびよりに、庭下駄がけで、我が別荘の背戸へ出たよう、扱帯しんぎで

棲取つまらぬばかりに、日の本の東西にただ二つの市の中を、徐々しずしず

と拾ったのが、たちまち電いなずまのごとく、颯さつと、照々てらてらとある円まるばし

柱らに影を残して、鳥居際から衝つと左へ切れた。

が、目にも留まらぬばかり、搔消かきけすがごとくに見えなくなつた。

高く競売屋せりうりやが居る、古いが、黒くがつしりした屋根越ごしの其方そなたの空、一点の雲もなく、冴さえた水色の隈くまなき中に、浅葱あさぎや、樺かばや、朱や、青や、色づき初そめた銀杏こずえの梢こずえに、風の戦そよぐ、と視ながめたのは、皆見世たてのぼりものの立たて幟ぼり。

太鼓に、鉦かねに、ひしひしと、打寄あしおとする登音あしおとの、遠巻にんずきめいて、遥はるかに淀川はるかにも響くと聞きしは、誓文にんず払いに出盛にんずる人数にんず。お珊にぎわも暮にぎわるれば練るといふ、宝よの市の夜よをかけた、大阪中にぎわの賑にぎわいである。

十五

「御覧なさい、これが亀の池です。」

と云う、男衆の目は、——ここに人を渡すために架けたと云うより、築つきやま山の景色に刻んだような、天満宮てんまんぐうの境内を左へ入つて、池を渡る橋の上で——池は視みないで、向う岸そへ外れた。

階きざはしを昇ひざまずつて跪ひざまずいた時、言い知らぬ神靈ひきしまに、引ひきしま緊ひきしまつた身の、拍かししわでし手も堅く附くつつい着たのが、このところまで退まかんで出でて、やつと掌たなそこの開くを覚えながら、岸に、そのお珊たたずのイんだのを見たのであつた。

魅ふでも投げたか、奴やつこと二人で、同じ状さまに洋傘こうもりを傾けて、熟じつと池おもの面を見入おもつてゐる。

初阪は、不思議な物語に伝える類たぐいの、同じ百里の旅人である。

天満の橋を渡る時、ふとどこともなく立たちあらわ顕あれた、世にも凄すごいまで美しい婦おんなの手から、一通玉章たまずさを秘めた文箱ふばこを託ことずかつて来て、

ここなる池で、かつて暗示された、別な美人たおやめが受取りに出たよ
うな気がしてならぬ。

しかもそれは、途中互たがいにももの言うにさえ、声の疲れた……激し
い人の波を泳いで来た、殷賑いんしん、心齋橋しんさいばし、高麗橋こうらいばしと相並ぶ、
天満の町筋を徹としてであるにもかかわらず、説き難き一種寂寞せきぼく
の感が身に迫った。参詣さんけい群集ぐんじゆ、隙間のない、宮、社やしろの、フト
した空地は、こうした水ある処に、思いかけぬ寂しさを、日中ひなかは
分けて見る事がありおりある。

ちようど池の辺ほとりには、この時、他に人影も見えなかつた。……

橋の上に小児こどもを連れた乳母が居たが、此方こなたから連立つて、二人
が行掛ゆきかかった機会しおに、

「さあ、のの様の方へ行こか。」と云つて、手を引いて、宮の方へ徐々帰つた。その状が、人間界へ立帰るごとくに見えた。

池は小さくて、武蔵野の埴生の小屋が今あらば、その潦ばか

りだけれども、深翠に萌黄を累ねた、水の古さに藻が暗く、

取廻わした石垣も、草は枯れつつ苔滑。牡丹を彫らぬ欄干も、巖

を削つた趣がある。あまつさえ、水底に主が棲む……その逸す

るのを封ずるために、雲に結えて鉄の網を張り詰めたように、百

千の細な影が、漣立つて、ふらふらと数知れず、薄黒く池の中に

浮いたのは、亀の池の名に負える、水に充満た亀なのであつた。

枯蓮もばらばらと、折れた莖に、トただ一つ留つたのは、硫

黄ヶ島の赤蜻蛉。

鯉ひらひらの背はひらひらと、お珊瑚もすその裳なびの影なびに靡なびく。

居たのは、つい、橋そなたの其方そなたであつた。

半襟は、黒に、蘆あしの穂かすかが幽あすかに白い、紺こんのじ地のじによりがらみの細い格子、お召縮緬めしちりめんの一枚小袖、ついわざとらしいまで、不断着で出たらしい。コオトも着ない、羽織の色が、派手に、渋く、そして際立つて、ぱつと目についた。

髪つやの艶つやも、色の白さも、そのために一際目立つ、——糸織か、
一いちちらく楽らくらしいいくすんだ中に、晃々きらきらと冴さえがある、きつぱりした地の藍あいなずみ鼠ねずみに、小豆色あずきいろと茶と紺と、すらすらと色の通つた縞しまの乱立らんたつ。

蒼空あおぞらの澄んだのに、水の色が袖に迫つて、藍は青に、小豆は

紅くれないに、茶は萌黄もえぎに、紺は紫くまの隈を染めて、明あかるい中に影さすばかり。
帯も長襦袢もこれに消えて、山深き処、年古ふるる池に、ただその、
すらりと雪を束つかねたのに、霧ながら木この葉に綾あやなす、虹にじを取つて、
細なめらく滑かに美しく、肩に掛けて背さばに捌き、腰に流したようである。
汀みぎわは水を取廻わして、冷い若木の薄もみじ。

光線は白かつた。

十六

その艶えんなのが、女めの童わらわを従えた風で、奴やつことイむ。
……汀つらに寄つて……流ながれぎ木きめいた板が一枚、ぶくぶくと浮いて、
苔こけ塗まみれに生

簀けすの蓋ふたのように見えるのがあつた。日は水を劃くぎつて、その板の上ばかり、たとえば温かさを積重ねた心持にふわふわ当る。

それへ、ほかほかと甲こうらを干した、木この葉に交つて青銭の散つた状さまして、大小の亀は十とウ二十、磧かわらの石の数々居た。中には軽石のごときが交つて。――

いづれ一度は擒とりことなつて、供養にとて放された、が狭い池で、昔売うりかい買かいをされたという黒奴くろんぼの男なん女によを思出させる。島、海、沢、藪やぶをかけた集り勢、これほどの数が込合つたら、月には波立ち、暗夜やみには潜ひそんで、ひそひそと身の上話がはじまろう。

故郷ふるさとなる、何を見るやら、向むきは違つても一つ一つ、首を据えて目を睜みはる。が、人も、もの言わず、活いきものがこれだけ居て余り

の静かき。どれかが幽かすかに、えへん、と咳せきばらい 払らいをしそうで寂さみしい。
 一頭ひとつ、ぬつと、ざらざらな首を伸ばして、長く反そつて、汀を仰
 いだのがあつた。心は、初阪等二人と齊ひとしく、絹糸の虹を視ながめた
 に違ちがひない。

「気味の悪いもんですね、よく見るといかにも頭つきが似ていま
 ずせ。」

男衆は両手を池の上へ出しながら、橋の欄干もたに凭よりて低声こごえで云
 う。あえて忍しのび音ねには及ばぬ事を。けれども、……ここで云うの
 は、直じかに話すほど、間近な人に皆聞える。

「まったく、魚うおじや鯿ぼらの面かお色つきが瓜二つだよ。」

その何に似ているかは言わずとも知れよう。

「ああああ、板の下から潜もぐり出して、一つ水の中から頭あれたのがあります。大分大きゆうがすせ。」

成程、たらたらと漆うるしのような腹を正ま的に、甲こうらに濡色の薄うす紅をさしたのが、仰あおむ向けに鰓あぎとを此方こなたへ、むつくりとして、そして頭の尖さきに黄色く輪取った、その目なが凸かにくるりと見えて、鱗うろこのざらめく蒼味あおみがかつた手を、ト板の縁ふちへ突張つっぱつて、水から半分ぬい、と出た。

「大将、甲羅干こうらしに板へ出る気だ。それ乗ります。」
と男衆の云った時、爪が外れて、ストーンと落ちた。
が、直ぐにすぼりと胸を浮かす。

「今度は乗るぜ。」

やがて、甲羅を、残らず藻の上へ水から離して踏張ふんばった。が、力足らず、乗出した勢いきおいが余つて、取外ずすと、ずんと沈む。

「や、不可いけない。」

たちまち猛然としてまた浮いた。

で、のしり、のしりと板へ手をかけ、見るも不器用に、堅い体を伸のしあ上げる。

「しつかりしつかり、今度は大丈夫。あ、またすべつた。大事な処で。」と男衆は胸を乗出す。

汀のお珊は、褌つまをすらりと足をちよいと踏替えた。奴島田やつこしまだは、洋傘こうもりを畳んで支ついて、直ぐ目の下を、前髪に手てびさし庇して覗のぞきこ込む。

この度は、場処を替えようとするらしい。

ななめ

斜ななめに甲羅を、板に添そって、手を掛かけながら、するすると泳ぐ。

さお

これが、棹さおで操るがごとくになって、夥多あまたの可心いい持もに乾いた亀の

子を、カラカラと載のせたままで、水をゆらゆらと流れて亘わたった。

が、熟じつとして噓くしゃみしたもの一つない。

板の一方は細いのである。

そこへ、手を伸ばすと、腹かかえこへ抱かかえこ込めそうに見えた。

いや、困った事は、重量おもみにお圧されて、板が引ひっかたむ傾かたむいたために、

だふん、と潜る。

「ほい、しまった。いや、串じょうだん戯たんじゃない。しつかり頼むぜ。」

と、男衆は欄干をトントン叩く。

あせる、と見えて、むらむらと紋が騒ぐ、と月影ばかり藻が分れて、端を探り探り手が掛かつた。と思うと、ずぼりと出る。

「蛙かわずだと青柳あおやぎすずり硯と云うんです。」

「まったくさ。」

十七

けれども、その時もし遂げなかった。

「ああ、惜おしい。」

男衆も共に、ただ一息と思う処で、亀の、どぶりと沈むごとに、思わず声を掛けて、手のものを落す心地で。

「執念深いもんですね。」

「あれ迄にしたんだ、揚げてやりたい。が、もう弱ったかな。」
と言う間もなかった。

この時は、手の鱗も逆立つまで、しやつきりと、爪を大きく開ける、と甲の揺ぐゆぐばかり力が入って、その手を扁平ひらたく板について、白く乾いた小さな亀の背に掛けた。

「ははあ、考えた。」

「あいつを力に取って伸上のしあがるんです、や、や、どツこい。やれ情なさけない。」

ざぶりと他愛たわいなく、
またもや沈む。

男衆が時計を視みた。

「もう二時半です、これから中の島を廻るんですから、徐々そろそろ帰り
ましよう。」

「しかし、何だか、揚るのを見ないじゃ気が残るようだね。」

「え、私も気になりますかね、だって、日が暮れるまで掛かかるかも
知れませんか。」

「妙に残のこり惜おしいようだよ。」

男衆は、汀みぎわの婦おんなにちよいと目を遣つて、密そつと片頬かたほお笑えみして声を
潜ひそめた。

「串じょうだん戯たわぶじゃありませんぜ。ね、それ、何だか薄うつつりと美しい五

色の霧が、冷ひやひや々と掛かかるようです。……変すこに凄すこいようですぜ。亀

が昇天するのもかも知れません。板に上ると、その機はずみ会あひに、黒雲を

捲起まきおこして、震動雷電……」

「さあ、出掛けよう。」

二人は肩を寒くして、コトコトと橋の中央ななかばから取つて返す。

やがて、渡果わたりはてようとした時である。

「ちよつと、ちよつと。」

と背後うしろから、優やさしいが張はりのある、朗かな、そして幅のある声して

呼んだ。何等の仔細しさいなしには済むまいと思つた半日。それぞれ、

言わぬ事か、それ言わぬ事か。

袖を合せて、前後あとさきに、ト齊ひとしく振返ると、洋傘こうもりは畳んで、

それは奴やつこに持たした。纏毛もつれげ一条ひとすじもない黒髪は、取つて捌さばいた

かと思うばかり、瘦やせぎすな、透通とおとるような頬を包んで、正面まともに顔

を合せた、襟はさぞ、雪なす咽喉のどが細かった。

「手前どもで、」と男衆は如才ない会釈をする。

奴は黙つて、片手をその膝のあたりへ下げた。

「そうどす。」と判はつきり然云つて莞爾にっこりする、瞼まぶたに薄く色が染まつて、類たぐいなき紅葉もみじの中の倂おもかげである。

「一遍お待ちやす……思おもひを遂げんと気がかりなよつて、見ていておくれやす。私あてが手伝うさかいな。」

猶ためら予めいあえず、バチンと蓮はすの果みの飛ぶ音が響いた。お珊おびどは留めの黄金きん金具、緑の照々きらきらと輝く玉を、烏羽玉うばたまの夜の帯から星を

手に取るよ、と自魚の指に外ずして、見得もなく、友染ゆうぜんを柔やわらかな膝なりに、腰をなよなよと汀に低く居て——あたかも腹を空に突つ

張ツつてによいと上げた、藻を押分けた——亀の手に、縋すがれよ、引かむ、とすらりと投げた。

帯留しろがねは、銀の曇うつたような打紐うちひもと見えた。

その尖さきは水に潜くぐつて、亀の子は、ぼくりと紐を噛かむ、ト袖口を軽く袂たもとを絞しぼつた、小腕こかいな白く雪を伸べた。が、重量おもみがかかるか、引く手に幽かすかに脈を打つ。その二の腕、顔、襟、頸うなじ、膚はだに白い処は云うまでもない、袖、褌つまの、艶えんに色めく姿、爪つま尖さきまで、——さながら、細い黒髪の毛筋をもつて、線を引いて、描き取った姿絵のようであつた。

池の面は、蒼く、お珊瑚の唇のあたりに影を籠めた。

風少し吹添って、城ある乾の天暗く、天満宮の屋の棟が淀り曇った。いずこともなく、はたはたと帆を打つ響きは、幟の声、町には黄なる煙が走ろう、数万人の形を掠めて。……この水のある空ばかり、雲に硝子を嵌めたるごとく、美女の虹の姿は、姿見の中に映るか、五色の絹を透通して、色を染めた木の葉は淡く、松の影が颯と濃い。

打紐にまた脈を打って、紫の血が通うばかり、時に、腕の色ながら、しろじろと鱗が光って、その友染に搦んだなりに懐中から一条の蛇の蛭り出た、思いかけず、ものの凄じい形になった。

「あ、」

と云う声して、手を放すと、蛇の目輝く緑の玉は、光を消して、亀の口に銜くわえたまま、するするする、と水脚を引いてそのまま底に沈んだのである。

奴やつこはじりじりと後に退すつた。

お珊みぎわは汀みぎわにすつくと立つた。が、血が留とつて、倅おもかげは瑪瑙めのうの白さを削とつたのであつた。

この婦おんなが、一念懸おんけて、すると云うに、誰たれが何を妨さげ得えよう。

日も待まちたず、その翌あけの日の夕暮時、宝たからの市いちへ練出ねりだす前に、――

丸官ゆうべが昨夜芝居しげで振舞まわつた、酒さけの上うへの暴ぼうぎやく虐やくの負債おんねを果はさせるため、とあつて、――南新地なんしんちの浪屋なみのやの奥二階おくにかい。金屏風きんびょうぶを引繞ひきめぐ

らした、四海波静しはいなみずかに青畳の八畳で、お珊自分に、雌蝶雄蝶めちようおちようの長柄ながえを取つて、橘活たちばなけた床の間の正面に、美少年の多一と、さて、名はお美津と云う、逢阪の辻、餅屋の娘を、二人並べて据えたのである。

晴の装束は、お珊が金子かねに飽あかして間に合わせた、宝の市の衣裳であつた。

まず上席のお美津を謂いおう。髪は結いたての水の垂るるような、十六七が濃つぶし島田。前髪をふつくり取つて、両端へはらりと分けた、遠山の眉にかかる柳の糸の振分は、大阪に呼んで（いたずら）とか。緋縮緬ひぢりめんのかけおろし。橘に実を抱かせた筈こしがいを両方に、雲井かおりの薰かおりをたきしめた、烏帽子えぼし、狩衣かりぎぬ。朱総しゆぶさの紐は、お珊が手

にこそ引結うたれ。着つけは桃にうすがすみ薄霞、朱鷺色絹ときいろぎぬに白い裏、
 膚はだえの雪くれなの紅ながさねの襲なまめに透くろじゆすくよう媚かしく、白しやの紗しやの、その狩衣を装い
 澄まして、黒くろじゆす縺子の帯、箱文庫。

含はなじろ羞まぶたむまぶた瞼まぶたを染めて、玉うなじの項うなじを差さしうつむ俯さしうつむ向さしうつむく、ト見ると、雛ひなづる鶴ひなづる
 一羽、松の羽衣かいと搔取かいとつて、曙あけぼのの雲の上なる、宴うたげに召あけぼのさるる風情が
 ある。

同じ烏帽子、紫の紐すいを深く、袖すいを並べて面おもむせ伏おもむせそうな、多一は
 浅葱あさぎしや紗すおうの素袍すおう着て、白びやくえ衣びやくえの袖つっを肅つっましやかに、膝つっに両手を差
 置いた。

前なるお美津は、小鼓やくもごとに八雲琴やくもごと、六人やくもごとずつが両側に、ハオ、
 イヤ、と拍子を取つて、金蔴きんまきえ絵きんまきえに銀ぎんびよう鉾ぎんびよう打ぎんびようつた欄干やぼねづき、輻やぼね

も漆の車屋台に、前まえ囃子ばやしとて楽を奏する、その十二人と同じ風俗。

後あと囃子ばやしが、また幕打った高い屋台に、これは男の稚ち児ごばかり、すり鉦がねに太鼓を合わせて、同じく揃う十二人と、多一は同じ装束である。

二人を前に、鉾ちようし子を控えて、人交ぜもしなかつた……その時およそ珊おいの装は、また立たち勝まさつて目覚しや。

十九

宝の市の屋台に付いて、市いち女めまた姫とも称とうなる十二人の美女が

練る。……

練衣ねりぎぬ小桂こうちぎの紅くれなの袴はかま、とばかりでは言足らぬ。ただその上うえし

下たを装束そうぞうくにも、支度しどの夜は丑満うしみつ頃頃より、女紅じよこう場ばに顔かほを揃そろ

えて一人々々ひとりひとり沐浴ゆあみをするが、雪ゆきの膚はだも、白脛しろはぎも、その湯ゆは一人

ずつ紅べにを流ながし、白粉おしろいを汲替くみかえる。髪かみを洗あらい、櫛くしを入れ、丈ぢやうより

長く解とき捌さばいて、緑きぬの雫しずくすらすらと、香こう枕まくらの香かほに霞あせむを待まち

ば、鶏けいの声こゑしばしば聞きえて、元結もとゆいに染そむ霜しもの鐘かねの音ね。血ちる潔けつく

清きよき身みに、唐衣からころもを着きけ、袴はかを穿はくと、しらしらと早あさひや旭あさひの影かげ

が、霧きりを破やぶつて色いろを映うつす。

さて住吉すまぎの朝あさぼらけ、白妙しろたえの松この樹この間まを、静々しづと詣もつで進すすむ、

路みちの裳もすそを、臯月さつきごてん御殿い、市いちの式殿しきだんにはじめて解といて、市いちの姫ひめは十二

人。袴を十二長く引く。……

その市の姫十二人、御殿の正面に揖して出づれば、神官、威儀正しく彼処かしこにあり。土器かわらけの神酒みき、結び昆布。やがて檜扇ひおうぎを授けらる。これを受けて、席に帰つて、緋や、萌黄もえぎや、金銀の縫ぬい箔光くを放つて、板戸も松の絵の影に、雲白く梢こずえめぐを繞る松林しょうりんに日の射す中さに、一列に並居なみいる時、巫子みこするすると立出たちいでて、美女おもひぢの面一人ごとに、式の白粉を施し、紅をさし、墨もて黛まゆずみを描くと聞く。

素顔の雪に化粧して、皓齒しろはに紅を濃く含み、神々しく気高いままで、お珊はここに、黛くろさえほんのりと描いている。が、女紅場の沐浴もくよくに、美しき膚はだを衆ぬに抽き、解き揃えた黒髪は、夥間なかまの丈を

おさ
 圧えたけれども、一人渠は、住吉の式に連る事をしなかつた。

間際に人が欠けては事が済まぬ。

世話人一同、袴腰を捻返して狼狽えたが、お珊が思うままな
 金子の力で、身代りの婦が急に立つた。

で、これのみ巫女の手を借りぬ、容色も南地第一人。袴の色
 の緋よりも冴えた、笹紅の口許に美しく微笑んだ。

「多一さん、美津さん、ちよつと、どないな気がおしやす。」
 からおりころも

唐織衣に思いもよらぬ、生地きじの芸妓げいこで、心易げに、島台を
 前に、声を掛ける。

素袍の紗しゃに透通る、燈ともしの影に浅葱あさぎとて、月夜に色の白いよう、
 多一は照らされた面色おももちだった。

「なあ？」とお珊が聞返す、胸を薄く数を襲^{かさ}ねた、雪の深い襲^{かさ}ねの襟に、檜扇を取つて挿していた。

「御察人様。」

と手を下げて、

「何も、何も、私^{わたくし}は申されませぬ。あの、ただ夢のようにござります。」とやつと云つて、烏帽子を正しく、はじめて上げた、女のような優しい眉の、右を残して斜めに巻いたは、笞^{しもと}の疵^{きず}に、無^む慚^{ざん}な縋^{ほうたい}帯。

お珊は黒目がちに、熟^{じつ}と睜^{みは}つて、

「ほんに、そう云うたら夢やな。」

と清らかな襖^{ふすま}のあたり、座敷を衝^つと^{みまわ}した。

ト柱、襖ふすま、その金屏風に、人の影が残らず映った。

映つて、そして、緋に、紫に、朱鷺色ときいろに、二人の烏帽子、素袍、狩衣、彩あやあるままに色の影。ことにお珊の黒髪が、一ひとすじ条長く、横雲掛けて見えたのである。

二十

時に、間まを隔てた、同じ浪屋の表二階に並んだ座敷は、残らず丸官が借り占めて、同じ宗右衛門町に軒を揃えた、両側の揚屋と齊ひとしく、毛氈もうせんを聯つらねた中に、やがて時刻に、ここを出て、一まず女紅場で列を整え、先立ちの露払い、十人の稚児ちごが通り、前まえまえば

囃子やしの屋台やしはぎを挟さんで、そこに、十二人の姫ひめが続く。第五番に、
 檜扇ひおうぎ取とつて練ねる約束やくそくの、我おのがお珊さんの、市いち随ずい一の曠はれの姿すがたを見よう
 ため、芸妓げいこ、幫たいこもち間まををずらりと並べて、宵よからここに座ざを構かまえ
 た。

が、その座敷ざしきもまだ寂寞ひっそりして、時々、階子段はしごだん、廊下らうげなどに、
 遠い登音あしおと、近く床しき衣きぬずれ摺すの音ねのみ聞きゆる。

お珊は袖そでを開ひらき、居直いぢつて、

「まあな、ほんに夢ゆめのようにあるな。私わたしかて、夢ゆめかと思う。」
 と、藪丈ろうたけた黛まゆずみ、恍惚うつつりと、多一たいつの顔かほを瞻みまもりながら、

「けど、何なにの、何なにの夢ゆめやおへん。たとい夢ゆめやかて。……丸官まるくわんはん
 の方もな、私わたしが身みに替かえて、承知しょうちさせた……三々さんさん九度くどやささい、

ああした我^{わが}ままな、好勝手な、朝云うた事は晩に変えやはる人やけど、こればかりは、私が附いているよつて、承^{うけお}合うて、どないしたかて夢にはせぬ。……あんじよう思うておくんなはれや。

美津^{みい}さん、」

と娘の前髪に、瞳を返して、

「不思議な御縁やな。ほほ、」

手を口許に翳^{かざ}したが、

「こう云うたかて、多一さんと貴女^{あんた}とは、前世から約束したほど、深い交情^{なか}でおいでる様子。今更ではあるまいけれど、私とは不思議な御縁やな。」

思うてみれば、一昨日^{おととい}の夜^よさり、中の芝居で見たまでは天王寺

の常楽会じょうらくえにも、天神様の御縁日にも、ついで出会うた事もなか

つたな。

一見いちげんでこうなつた。

貴女あなたな、ようこそ、芝居の裏で、お爺じいはんの肩摺さすつて上げなは

つた。多一さんも人目忍ひとくさりんで、貴女の孝行手伝わはつた。……自

分介抱するよつて、一条ひとくさりなど、可愛い可愛い女房おかみはんに、沢山たん芝

居を見せたい心や。またな、その心を汲取くみとつて、鶉うずらへ嬉いそいそ々々お帰

りやした、貴女の優しい、仇気あどけない、可愛らしさも身に染みて。

……

私はな、丸官はんに、軋ぎしぎし々と……四角あたまな天窓乗せられて、鶉

の仕切も拷問ごうもんの柱とやら、膝も骨も砕けるほど、辛い苦しい堪

え難い、石を抱く責苦に逢うような中でも、身節も弛んで、恍惚するまで視めていた。あの………扉の、お仕置場らしい青竹の矢来の向うに………貴女等の光景をば。——

悪事は虎の千里走る、好い事は、花の香ほども外へは漏れぬ言うけれど、貴女二人は孝行の徳、恋の功、恩愛の報だすせ。誰も知るまい、私一人、よう知った。

逢阪に店がある、餅屋の評判のお娘さん、御両親は、どちらも行方知れずなつた、その借錢やら何やらで、苦勞しなはる、あのお爺さんの孫や事まで、人に聞いて知つたよつて、ふとな、彼やこれや談合しよう気になつたも、私ばかりの心やない。

天満の天神様へ行た、その帰途に、つい虚気々々と、もう黄

昏れやいう時を、寄つてみたい氣になつて、貴女の餅屋へ土産買
う振りで入つたら、」

と微笑みながら、二人を前に。

「多一さんが、使の間まをちよつと逢いに寄つて、町並灯あかりともの点され
た中に、その店だけは灯ひもつけぬ、暗いに島田が黒かつたえ。そ
のな、繙帯が白う見えた。」

二十一

小指を外そらして指の輪を、我目の前まへへ、……お珊はそれが縁を
結ぶ禁まじない厭いとであるようにした。

「密々ひそひそ、話していやはったな。……そこへ、私が行合ゆきあわせたも、この杯ざいの瑞祥ししょうだすぜ。

ここで夫婦にならばつたら、直ぐにな、別に店を出してもらうなり、世帯しやたい持つてそこから本店ほんだなへ通うなり、あの、お爺はんと、三人、あんじよ暮らして行ゆかはるるように、私がちやと引受けた。弟、妹の分にして、丸官はんに否いやは言わせぬ。よつて、安心おしやすや。え、嬉しいやろ。美津みづさんが、あの、嬉しそうなえ。どうや、九太夫くだゆうはん。」

と云つた、お珊は、密そつと声を立てて、打解けた笑顔になつた。多一は素袍あさぎの浅葱あさぎを濃く、袖を緊しめて、またその顔を、はツと伏せる。

「ほほほほ多一さん、貴下あんた、そうむつかしゆうせずと、胡坐組じようらむ気で、杯しなはれ。私かて、丸官はんの傍そばに居るのやない、この一月は籍のある、富田屋とんだやの以前の芸妓げいこ、そのつもりで酌をするのえ。

仮祝言や、儀式も作法も預かるよつてな。後のちにまたあらためて、歴然れつきとした媒妁人なこうど立てる。その媒妁人やつたら、この席でこないな串戯わやくは言えやへん。

そない極きまらずといっておくれやす。なあ、九太夫はん。」

「御察人様。」

と片手を畳へ、

「私はもう何も存じません、胸一杯で、ものも申されぬように。」

ざります。が、その九太夫は情のうござります。^{なさけ}」

と、術なき中にも、ものの嬉しそうな笑を含んだ。^{えみ}

「そうやかて、貴方、^{あんた}一昨日の暮方、^{おととい}餅屋の土間に、……そないして、話していなはった処へ、私が、卜行た……姿を見ると、腰掛框の縁の下へ、慌てもうて、潜つて隠れやはったやないかいな。」

言う——それは事実であつた。——

「はい、唯今でこそ申します、御寮人様がまたお意地の悪い。その框へ腰をお掛けなされまして、盆にあんころ餅寄せ、茶を持ってと、この美津に御意ござります。」

その上、入る穴はなし、貴女様の召しものの薫が、^{かおり}魔薬とやら

を嗅ぎますようで、気が遠くなりました。

その辛さより、犬になつてのこのこと、下屋を這出しました時が、なお術のうござりましてござります。」

「ほほほ可厭な、この人は。……最初はな、内証で情婦に逢やはるより何の余所の人でないものを、私の姿を見て隠れやはつた心の裡が、水臭いようにあつて、口惜いと思うたけれど、な、……手を支いて詫言やはる……その時に、門のとまりに、ちよんと乗つて、むぐむぐ柿を頬張つていた、あの、大な猿が、土間へ跳下りて、貴下と一所に、頭を土へ附けたのには、つい、おろおろと涙が出たえ。

柿は、貴下の土産やつたそうに聞くな。

天王寺の境内で、以前舞わしてやった、あの猿。どないなつた問うた時、ちと知縁のものがあつて、その方へ、とばかり言うて、預けた先方さきを話しなはらん、住吉辺の田舎へなど思うたら、大切だいじな許とこに居るやもの。

おお、それなりで、貴方あんたたちを、私が方へ、無理に連れもつて来てしもうたが、うっかりしたな、お爺はんは、今夜は私の市女笠持つて附いてもらうよつて、それも留守。あの、猿はどうしたやろな。」

「はい、」

と娘が引取つた、我が身の姿と、この場の光景ようす、踊のさらいにせりふ台辞を云うよう、細く透るとお、が声震えて、

「お爺さんが留守の時も、あの、戸を閉めた中に居て、ような、いつも留守してくれますのえ。」

二十二

「飼主とは申しましても、かえって私の方が養われました、あの、猿でさえ、……」

多一は片手に胸をおさ圧えて、

「御寮人様は申すまでもござりません、大道からお拾い下さりしました。……また旦那様の目を盗みまして、私は実に、畜生にも劣りました、……」

「何や……怪我けがに貴方あんたは何やかて、美津みいさんは天人や、その人の夫やもの。まあ、二人して装束をお見やす、雛ひなを並べたようやないか。

けどな、多一さん、貴下あんたな、九太夫やったり、そのな、額の疵きずで、床下から出やはった処は仁木にっきどすせ。沢山たんと忠義な家来ではどちらやかてなさそうな。」

と軽口かろくちに、奥もなく云うて退のけたが、ほんのりと潤うるみのある、
 瞼まぶたに淡く影が映さした。

「ああ、わやく云う事やない。……貴方あんた、その疵、ほんとにもう疼痛いたみはないか。こないした嬉うれしさに、ずきずきしたかて忘らりよう。けど、疵は刻んで消えまいな。私が傍そばに居たものを。美津みいさ

んの大事な男に、怪我させて済まなんだな。

そやけど、美津さん、怨うらみにばかり、思いやすな。何百人か人

目の前で、打ち擲うちやくされて、熟じつと堪こらえていやはったも、辛抱しと

げて、貴女あんたと一所に、添そ遂とげたいばかりなんえ。そしたら、男の

心しんじゆう中の極ごく印いん打うつたも同じ事、喜よろこんだかて可いいのどす。」

お美津は堪こらえず、目に袖を当てようとした。が、朱鷲ときいろ色衣いろに裏

白しろきは、神の前なる薄紅梅、涙に濡ぬらすは勿な体たない。緋縮緬ひしゅくめんを手

にから搦なむ、襦袢じゆばんは席の乱れとて、強つよいて堪こらえた頬ほのえくぼに、前髪まへかみの艶えん

しとしとと。

お珊まなじりは眦まなじりを多た一いちに返かえして、

「な、多た一いちさんもそうだすやろな。」

「はい！」と聞返すようにする。

「丸官はんには、柿の核吹かけられたり、口車に綱つけて廊下を引摺廻されたり、羅宇のポツキリ折れたまで、そないに打擲されやして、死身しにみになつて堪えなはつたも、誰にした辛抱でもない、皆、美津さんのためやろな。」

「……………」

「なあ、貴方、」

「……………」

「ええ、多一さん、新にいまくら枕まくらの初言葉ういことばと、私もここでちやんと聞く。……女子おなごは女子同士やよつて、美津さんの味方して、私が聞きたい。貴方はそうはなかるうけど、男は浮気な……」

と見る、月がぱつちりと輝いた。多一は俯向うつむいて見なかつた。

「……ものやさかい、美津さんの後の手券てがたに、貴方の心を取つておく。ああまで堪えやした辛抱は、皆女子へ、」

「ええ、」

「あの、美津さんへの心中だてかえ。」

多一はハツと畳に手を……その素袍、指貫さしぬきに、刀なき腰は寂しいものであつた。

「御察人様、御推量を願ひとうござります。誓文それに相違ごごりません。」

お美津の両手も、鶴の白羽の狩衣に、玉を揃えて、前髪摺れに支ついていた、簪かんざしの橘薫たちばなりもする。

「おお……嬉し……」

と胸を張つて、思わず、つい云う。声の綾あやに、我を忘れて、道成寺の一条ひとくだけりの真紅の糸が、鮮麗あざやかに織込まれた。

それは禁制にしきの錦であつた。

ふと心付いた状さまして、動悸どうきを鎮めるげに、襟なる檜扇ひおうぎの端をしつかとおさ圧えて、卜後うしろを見て、襖ふすまにすらり靡なびいた、その下げ髪なまの丈ながを視めた。

お珊の姿は陰々とした。

夫婦が二人、その若い顔を上げた時、お珊は何気なきおももち面色した。「ほんになあ、くどいようなが多一さん、よう辛抱しやはった。中の芝居で、あの事がなかったら、幾ら私が無理云うたかて、丸官はんはこの祝言を承知さす事はようせんもの。……そりやな、夫婦にはならはったかて、立行くように世帯が出来んとならんやないか。

通い勤めなり、別に資本出すなりと、丸官はんはんに、応、言わせとも、皆、貴方あんたが、美津みいさんのために堪こらえなはった、心しんじゆうだて中立一つやな。十年七年の奉公を一度に済ましなはったも同じ事。

額の疵きずは、その烏帽子に、金ダイヤモンド剛石を飾さつたような光が映さす：

…おお、天あっぱれ晴なお婿はんはん。

さあ、お嫁はん、お酌しような。」

と軽く云つたが、あでやか艶麗に、しかも威儀ある座を正して、

「お盞さかずき。」

で、長柄の銚子ちょうしに手を添えた。

朱塗の蒔絵まきえの三組みつぐみは、浪に夕日の影を重ねて、蓬菜ほうらいの島の

松の葉越に、いかにせし、鶴は狩衣の袖をすくめて、その盞を取ろうとせぬ。

「さ、お受けや。」

と、お珊が二度ばかり勧めたけれども、騷さわぎた立つらしい胸の響

きに、烏帽子の総ふさの揺るるのみ。美津は遺瀬やるせなげに手を控える。

ト熟じつと視みて、

「おお、まだ年の行かぬ、嬰兒はんや。多一はんと、酒事しやはった覚えがないな。貴女盞を先へ取るのを遠慮やないか。三々九度は、嫁はんが初手に受けるが法やけれど、別に儀式だった祝言やないよつて、どうなと構わん。」

そやったら多一さん、貴方先へお受けやす。」

「はい、」と齊しく逡巡する。」

「どうしやはったえ。」

「御寮人様、一生に一度の事でござります。とてもものに、ものが逆になりませんよう、やっぱり美津から……」

とちよつと目を合せた。

「女から、お盞を頂かして下さりまし。」

「そやかて、含羞はにかんでいて取んなはらん。……何や、貴方あんたがた、おかしなえ。」

ふと気色ばんだお珊さまの状さまに、座ざが寂しんとして白けた時、表座敷に、テンテン、と二ツ三ツ、音ねじめの音が響いたのである。

二人は黙もくつて差俯さしうつむ向むく。……

お珊は、するりと膝ひざを寄せた。屹きつとして、

「早はやうおしや！ 邪魔じゃまが入るとならんよつて、私も直じきに女紅場へ行かんとならんえ。……な、あの、酌人しやくじんが不足ふそくなかい。」

二人は、せわしげに瞳ひとみを合あして、しきりに目めでものを云いつていた。

「もし、」

と多一が急せいた声で、

「御寮人様、この上になお罰が当ります。不足やなんの、さよう
な事がありましたて可いいものでござりますか。御免下さりまし、申
しましょう。貴女様、その召しました、両方のお袂たもとの中が動きま
す。……美津は、あの、それが可恐こわいのでござります。」と判はつき
然り云りつた。

と、おとがいひおうぎ頤おとがいを檜ひ扇おうぎに、白小袖の底を透すかして、
「これか、」

と投げたように言いながら、衝つと、両手を中へ、袂を探つて、
肩をふらりと、なよなよとその唐織の袖を垂れたが、品ひんを崩して、
お手玉持つよ、と若々しい、仇あどけ気けない風があつた。

「何や、この一二条ふたすじの蛇が可恐い云うて？……両方とも、言合わせたように、貴方あんた二人が、自分たちで、心願掛けたものどつせ。

餅屋の店で逢うた時、多一さん、貴方あんたはこの袋一つ持っていたな、買うて来るついでではあつて、一ひとよさいのり夜祈はあげたけれど、用の間が忙しゆうて、夜さり高津の蛇穴へ放しに行く隙ひまがない、頼まれてほし欲しい——云うて、美津さんに託ことづきよう、とそれが用で顔見に行かゆはつた云うたやないか。」

二十四

「美津さんもまた、日が暮れたら、高津へ行て放す心やった云う

て、自分でも一筋。同じ袋に入つたのが、二ツ、ちよんと、あの、猿の留木とまりぎの下に揃えてあつて、——その時、私に打明けて二人して言やはつたは、つい一昨日おとといの晩方や。

それもこれも、貴方あんたがた、芝居の事があつてから、あんな奉公早う罷やめて、すぐにも夫婦になれるようにと、身体からだは両方別れていて、言合せはせぬけれど、同じ日、同じ時に、同じ祈いのりを掛けやはる。……

蛇も二筋落合うた。

案の定、その場から、思いが叶かのうた、お二人さん。

あすこのな、蛇屋に蛇は多けれど、貴方がたのこの二三条ふたすじほど、験げんのあつたは外にはないやろ。私かて、親はなし、稚ちいさい時から勤つとめ

をした、辛い事、悲しい事、口惜しい事、恋しい事、」

と懐手のまま、目を睜みはつて、

「死にたいほどの事もある。……何々の思おもいが遂げたいよつて、貴あ方んた二人に類似あやかりたさに、同じ蛇を預つた。今少し、身に附けていたいよつて、こうしておいておくれやす。

貴方、結ぶの神やないか。

けどな、思い詰めては、自分の手でも持ったもの。一度、願ねがい
叶うた上では、人の袂にあるのさえ、美津さん、婦おんなは、蛇は、可い
厭やらしな!

よう貴女あんた、これを持つまで、多一さんを思やはった、婦おんな同土や、
察せいでか。——袂にあつたら、粗相して落すとならん。憂きづ慮かい

なやろさかい、私がこうするよつて、大事ないえ。」

と袖の中にて手を引けば、うちぶところ内懐の乳のあたり、浪打つよう

に膨らみたり。

「おんな婦の急所でおさ圧えておく。……乳くわ銜えられて、私が死のうと、盞

の影ものぞ覗かせぬ。さ、美津さん、まず、お前に。」

お珊は長柄をちようと取る。

美津は盞を震えて受けた。

手の震えでたらたら滴々とたまち露散るごとき酒の雫しずくちなわ、蛇の色ならずや、酌

参るお珊の手を掛けてともしび燈の影ながら、青白き艶つやが映つたのである。

はたはたとお珊が手をたた拍くと、かねて心得たさしてあつたろう。

廊下の障子の開く音して、すらすらと足袋たびずれ摺に、一間を過ぎて、

また静しずかにこの襖ふすまを開けて、

「お召し、」

とそこへ手を支ついた、裾模様すその振袖は、島田の丈長たけなが、舞妓まいこに
あらず、家うちから斉眉かしずいて来ている奴やつこであつた。

「可よいかい。」

「はい。」と言いさま、はらはらと小走りに、もとの廊下へ一度
出て、その中庭を角にした、向うの襖をすらりと開けると、閨紅くわんこう
に、翠みどりの夜具。枕頭まくらもとにまた一人、同じ姿の奴が居る。

お珊こなたが黙もくつて、此方こなたから差覗さしのぞいて立つたのは、竜田姫たつたひめのイ
んで、霜葉もみじの錦たにの谿深たにく、夕映たにえたるを望ありめる光景あきさま。居たのが立
つて、入つたのと、奴二人の、同じ八尺対扮装ついでたち。紫の袖、白襟

が、紫の袖、白襟が。

袖口燃ゆる緋縮緬ひぢりめん、ひらりと折目に手を掛けて、きりきりと左右へ廻して、枕おほを蔽う六枚屏風びようぶ、表に描かいたも、錦葉にしきばなるべし、裏しろがねに白銀の水が走る。

「あちらへ。」

お珊が二人を導いた時、とかくして座を立つた、美津が狩衣の袴の裾は、膝あしわを露顕あらかわな素足なるに、恐ろしい深山路みやまじの霜を踏んで、あやしき神の犠牲にえに行くゆ……なぜか畳たたは辿たど々たどしく、ものあわれに見えたのである。奴二人は姿を隠した。

屏風を隔てて、この紅くれないの袴なこうどした媒人は、花やかに笑ったのである。

一人を褥しとねの上に据えて、お珊がやがて、一人を、そのあとからねや閨へ送ると、前のが、屏風の片端から、烏帽子のなりで、するりと抜ける。

下髪さげがみであとを追って、手を取って、枕頭まくらもとから送込むと、そこに据えたのが、すつと立って、裾から屏風を抜けて出る。トすぐに続いて、縋すがつて抱くばかりにして、送込むと、おさえておいたのが、はらはら出る。

素袍すおう、狩衣、唐衣、綾あやと錦の影を交えて、風ある状さまに、裾袂、

追いつ追われつ、ひらひらと立舞う風情に閨を繞めぐつた。巫山ふざんの雲かけはがに棧懸れば、名もなき恋の淵ふちあらむ。左、橘たちばな、右、桜、衣きぬの模様の色香を浮かして、水は巴ともえに渦を巻く。

「おほほほほ、」

呼吸いきも絶ゆげな、なえたような美津の背せなを、屏風の外で抱えた時、お珊は、その花やかな笑わらいを聞かしたのである。

好きよ機会しおとや思おいけん。

廊下あしおとに登音あしおと、ばたばたと早く刻んで、羽織袴の、宝の市の世話人一人、真先まつさきに、すすすすつと来る、当浪屋の女房かみさん、仲居まじりに、奴が続いて、迎むかいの人数にんず。

口々に、

「御寮人様。」

「お珊瑚様。」

「女紅場では、屋台の組も乗込みました。」

「貴女ばかりを待兼ねてござります。」

襖の中から、

「車は？」

しずか
と静に云う。

「綱も申し着けました、」と世話人が答えたのである。

「待たせはせぬえ、大事な処へ、何や！」

と声が凜りんとした。

黙って、すたすた、一同は廊下を引く。

とばかりあつて、襖をあけた時、今度は美津が閨に隠れて、枕も、袖も見えなんだ。

多一が屏風の外に居て、床の柱の、釣籠つりかごの、白玉椿しらたまつばきの葉の艶より、ぼんやりとした素袍で立った。

襖がくれの半身で、廊下の後前あとさきを熟じつと視みて、人の影もなかつた途端に、振返ると、引寄せた。お珊かの腕うでが頸くちにかかると、倒れるように、ハタと膝を支ついた、多一の唇に、俯向うつむきざまに、衝つと。

丸官の座敷を、表うらに視ながめて、左右に開いたに立寄りもせず、階は子段しごだんを颯さつと下りる、とたちまち門かどへ姿が出た。

軒を離くれて、俥くるまに乗る時、欄干に立つた、丸官、と顔を上うえ下した

に合すや否や、矢を射るような二人曳ににんびき。あれよ、あれよと云うばかり、廓くるわともしの灯に影を散らした、群集ぐんじゆはぱつと道を分けた。

宝の市の見物は、これよりして早や宗右衛門町の両側に、人垣を築いて見送つたのである。

その年十月十九日、宝の市の最後の夜よは、稚児ちご、市女いちめ、順々に、後あと 圧おさえの消防夫しよごしが、篝かがりび火か赤あかき女紅場の庭を離れる時から、屋台の囃子つさき、姫たちなど、傍目わきめも触ふらぬ婦おんなたちは、さもないが、真ま先に神輿みこしを荷にのうた白はくちよう丁ちやうはじめ、立傘たてがさ、市女笠いちめがさ持ちの人足あしなど、頻しきりに氣きにしては空を視ながめた。

通り筋すぢの、屋根やぐらに、廂ひさしに、しばしば鴉からすが鳴いたのである。

次第しだいに数かずが増あすと、まざまざと、薄うすづき月の曇くもつた空そらに、嘴くちばしも翼よく

も見えて、やがては、練ねりものの上を飛交わす。

列が道頓堀に小休みをした時は、立並ぶ芝居の中の見物さえ、頻りに鴉からすなき鳴を聞いた、と後で云う。……

二十六

「宗八そつぱ、宗八そつぱ。」

浪屋の表座敷、床の間の正面に、丸田官蔵、この成金、何の好みか、例なる詰襟つめえりの紺の洋服、高胡坐たかあぐら、座にある幫間ほうかんを大音に呼ぶ。

「はッ、」

「き様、逢阪のあんころ餅へ、使者に、後押あとおしで駈着かけつけて、今帰つた処じやな。」

「御意にござります、へい。」

「何か、直ぐに連れてここへ来る手筈てはずじやつた、猿は、留木とまりぎから落ちて縁の下へ半分身体からだを突込つっこんで、斃死くたばつしていたげに云う：
：嘘でないな。」

「実説正銘にござりまして、へい。餅屋みせ店では、爺じいの伝五いめに、今夜、貴方あなたさま様、お珊瑚さんごの方様、」

と額たまを敲たたいて、

「すなわち、御寮人様、市へお練出しのお供を、お好このみとあつて承ります。……さてまた、名代娘のお美津さんは、御夫婦これに――

—ええ、すなわち逢阪の辻店は、戸を寄せ掛けた明巢あきすにござりま
す。

処へ宗八、丸官閣下お使者といたし、車を一散に乘着けまして、
隣家の豆屋の女房立会い、戸を押開いて見ましたれば、いや、は
や、何とも悪あく食くじきがないたい様子、お望みの猿は血を吐いて斃お
ち果てておりましたに毛頭相違ござりません。」

「うむ。」

と苦にがりき切うなずつて頷うなずきながら、

「多一、あれを聞いたかい、その通りや。」と、ぐつと見下ろす。

一座の末に、うら若い新夫婦は、平伏ひれふしていたのである。

これより先、余り御無体、お待ちや、などと、慌あわただしい婦おんなまじり

の声の中に、丸官の形、猛然と躍おどりあが上あがつて、廊下を鳴らして魔のごとく、二人の閨ねやへ押寄せた。

襖をどんと突明けると、床の間の白玉椿、怪しき明星のごとき別天地に、こは思いも掛けず、二人の姿は、綾の帳とぼりにも蔽おおわれず、指貫さしぬきやなど、烏帽子の紐ひもも解かないで、屏風びょうぶの外に、美津は多一の膝ふに俯し、多一は美津の背せなに額ぬかを付けて、五人囃子の雛ひな二個たつ、袖を合せたようであつた。

揃つて、胸先がキヤキヤと痛むと云う。

「酒啖くらえ、意気地なし！」

で、有無を言わせず、表二階へ引出された。

欄干の緋ひの毛もうせん氈せんは似たりしが、今夜は額を破るのでない。

「練ものを待つ内、退屈じや。多一やい、皆への馳走に猿を舞わいて見せてくれ。恥辱ではない。汝や、丁稚から飛上つて、今夜から、大阪の旦那の一人。旧を忘れぬためという……取立てた主人の訓戒と思え。」

呼べ、と言えば、婦どもが愚図々々吐す。新枕は長鳴鶏の夜があけるまでは待かねる。

主従は三世の中じや、遠慮なしに閨へ推参に及んだ、悪く思うまいな。汝や、天王寺境内に太鼓たたいていて、ちよこんと猿負背で、小屋へ帰りがけに、太夫どのに餅買うて、汝も食いおつた、行帰りから、その娘は馴染じやげな。足洗うて、丁稚になるとて、右の猿は餅屋へ預けて、現に猿ヶ餅と云うこと、ここに居る婦ど

もが知った中。

田畝たんぼの鼠ねずみが、蝙蝠こうもりになつた、その素袍すおうひらつかいたかて、今

更隠すには当らぬやて。

かえつて卑怯ひきようじや。

遣やつてくれい。

が、聞く通り、ちやと早手廻しに使者を立てた、宗八が帰つて

の口上、あの通り。

残念な、猿太夫は斃おちたとあるわい。

唄うたなと歌え、形かたちなと見せおれ。

何吐ぬかす、

と、とりなしを云つた二三人の年増ねいこの芸妓げいこを睨ねめ廻まわいて、

「やい、多一！」

二十七

「致します、致します。」

と呼吸いきを切つて、

「皆さん御免なさりました。」

多一はすつと衣紋えもんを扱しごいた。

浅葱あさぎの素袍、侍烏帽子が、丸官と向う正面。芸妓、舞妓は左右に開く。

その時、膝に手を支ついて、

「……ま猿めでとうのう仕る、踊るが手許立廻り、肩に小腰をゆすり合せ、静やかに舞うたりけり……」

声を張つた、扇拍子、畳を軽く拍ちながら、「筑紫下りの西国船、艫ともに八挺ちよう、舳へに八挺、十六挺の櫓ろかいを立てて……」

「やんややんや。ああ惜い、太夫が居おらぬ。千代鶴やい、猿になれ。一若、立たぬか、立たぬか、此奴こいつ。ええ！ 婆ばばどもでまけてやろう、古猿こげざるになれ、此奴等こいつら……立たぬな、おのれ。」

と立身たちみあが上りに、盞さかずきを取つて投げると、杯はいせん洗せんの縁ふちにカチリと碎けて、颯さつと欠かけらが四辺あたりに散つた。

色めき白ける燈ともしびに、一重ひとえまぶち瞼まぶちの目を清すずしく、美津は伏おもてせたる面おもてを上げた。

「ああ、皆さん、私が猿を舞いまつせ。旦那さん、男のためどす。畜生になつてな、私が天王寺の銀杏いちようの下で、トントン踊つて、養うよつてな。世帯せいでも大事な、もう貴下あんた、多一さんを虐いじめんとおくれやす。

ちやと隙ひまもろうて去ぬよつて、多一さん、さあ、唄いいな、続いて、」

と、襟の扇子を衝つと抜いて、すらすらと座へ立つた。江戸は紫、京は紅べに、雪の狩衣被かけながら、下萌したもゆる血の、うら若草、萌黄もえぎは難波なにわの色である。

丸官は掌こぶしを握こぶつた。

多一の声は凜りんりん々として、

「しもにんにんの宝の中に——火取る玉、水取る玉……イヤア、」
と一つ掛けた声が、たちまち切なそうに掠れた時よ。

(ハオ、イヤア、ハオ、イヤア、) 霜夜を且つちる錦葉の音かと、
虚空に響いた鼓の掛声。

(コンコンチキチン、コンチキチン、コンチキチン、カラ、タツ
ポツポ) 摺鉦すりがね入れた後あと囃子ばやしが、遥はるかに交つて聞えたは、先駆す
でに町を渡つて、前囃子の間近な氣勢けはい。

が、座を乱すものは一人もなかつた。

「船の中には何とお寝るぞ、苦くるを敷寝に、苦を敷寝に 楫枕かじまくら、
楫枕。」

玉を伸べたる脛はざもめげず、ツト美津は、畳に投げて手枕たまくらした。

その時は、別に変つた様子もなかつた。

多一が次第に、齒も軋きしむか、と声を絞つて、

「葉越しの葉越しの月の影、松の葉越の月見れば、しばし曇りて
また冴さゆる、しばし曇りてまた冴ゆる、しばし曇りてまた冴ゆる

……」

ト袖を捲いて、扇子を翳おうぎし、胸を反らして熟じつと仰いだ、美津の

瞳は氷れるごとく、瞬またたきもせず睜みはると斉ひとしく、笑靨えくぼに颯さつと影がさし

て、爪立つまだつ足が震えたと思うと、唇をゆがめた皓齒しらはに、蒼つぼみのよう

な血を嚙かんだが、烏帽子の紐の乱れかかつて、胸に千条ちすじの鮮からくれ

血ない。

「あ、」

と一声して、ばったり倒れる。人目も振りも、しどろになつて背せなに縫すがつた。多一の片手の掌てのひらも、我が唇を圧余おさえつて、血汐ちしおは指あふを溢れ落ちた。

一座わつと立騒ぐ。階子はしごへ遁にげて落ちたのさえある。

引仰ひきあおむ向けてしつかと抱き、

「美津みいさん！……二、二人は毒害された、お珊、お珊、御寮人、

お珊おんなめ、婦おんな！」

二十八

「床几しょうぎ、」

と、前後まえうしろの屋台の間に、市女いちめの姫の第五人目で、お珊が朗かな
 声を掛けた。背後うしろに二人、朱の台傘を廂ひさしより高々と地摺じすれの黒髪に
 さしかけたのは、白丁はくちようでたち扮装の駕籠人足。並んで、萌黄紗もえぎしやに
 朱の総結ふさんだ、市女笠を捧げて従つたのは、特にお珊が望んだと
 いう、お美津の爺じいの伝五郎。

印半纏しるしばんでん、股引ももひき、腹掛けの若いものが、さし心得て、露じ
 とりの地に据えた床几に、お珊は真先まっさきに腰を掛けた。が、これ
 は我儘わがままではない。練ねりものは、揃つて、宗右衛門町のここに休む
 のが習ならいであつた。

屋台の前なる稚児ちごをはじめ、間をものの二間けんばかりずつ、真まっす
 直ぐに取つて、十二人が十二の衣きぬ、色を勝すぐつた南地の芸妓げいこが、揃

つて、一人ずつ皆床几に掛かる。

台傘の朱は、総二階一面軒ごとの緋ひの毛氈もうせんに、色映さしか交わして、
 千本植ちもとえたる桜こずえくるわの梢、廊の空に咲かかる。白の狩衣、紅梅小袖、
 灯ともしびの影にちらちらと、囃子の舞妓、芸妓など、霧に揺据ゆりすわつて、
 小鼓やくもごと、八雲琴しらべの調を休むと、後あと囃子ばやしなる素袍あきぎの稚児あさぎが、浅あさぎ
 葱桜ざくらを織交あせて、すり鉦がね、太鼓ねの音も憩どよめきう。動揺どよめき渡る見物は、
 大河の水を堰せいたよう、見渡す限り列のある間、——一尺ごとに
 百目ひやくめろうそく蠟燭あお、裸火あおを煽らし立てた、黒塗あおに台附の柵の堤を築い
 て、両方へ押分けたれば、練もののみが静まり返つて、人形のよ
 うに美しく且すこつ凄すこい。

ただその中を、福草履はかまひたひたと地を刻んで、袴せわの裾せわを忙せわしそ

う。二人三人、世話人が、列の柵摺れに往きつ還りつ、時々顔を合せて、二人囁く、直ぐに別れてまた一人、別な世話人とちよつと出遇う。中に一人落しものをしたように、うろうろと、市女たちの足許を覗いて歩行くものもあつて、大な蟻の働振、さも事ありげに見えるばかりか、傘さしかけた白丁どもも、三人ならず、五人ならず、眉を顰め口を開けて空を見た。

その空は、暗く濁つて、ところどころ朱の色を交えて曇つた。中を一^{ひとすじ}条、列を切つて、どこからともなく白気が渡つて、細々と長く、遥に城ある方に靡く。これを、あたりの湯屋の煙、また、遠い煙筒の煙が、風の死したる大阪の空を、あらん限り縫うとも言つた。

宵には風があつた。それは冷たかつたけれども、こはるなき小春風の日
 の余残なごりに、薄月さえおぼろおぼろ朧々おぼろおぼろと底の暖いと思つたが、道頓堀で小
 休みして、やがて太左衛門橋を練込む頃から、まつくら真暗になつたの
 である。

鴉は次第に数を増した。のみならず、白氣あやしの怪みもあるせいか、
 誰云うとなく、今夜十二人の市女の中に、姫の数が一人多い。す
 べて十三人あると言交わす。

世話人てあい徒が、妙に氣にして、それとなく、一人々々数えてみる
 と、なるほど一人姫が多い。誰も彼も多いと云う。

念のために、他所よそみ見ながら顔のぞを覗いて、名を銘々に心に留める
 と、決して姫が殖ふえたのではない。おきて定の通り十二人。で、また見

渡すと十三人。

……式の最初、住吉詣もうでの東雲しののめに、女紅場で支度はしたが、急にお珊おさんが気が變つて、社やしろへ参らぬ、と言つたために一人俄にわか拵ごしらえに数を殖ふやした。が、それは伊丹幸いたこうの政巳まさみと云つて、お珊おさんが稚わかい時から可愛がつた妹分。その女は、と探つてみると、現に丸官に呼ばれて、浪屋の表座敷に居ると云うから、その身代りが交つたというのでもないのに。……

それさえ尋常ただならず、とひしめく処に、搗かてて加えて易からぬは、世話人の一人が見附けた——屋台が道頓堀を越す頃から、橋へかけて、列の中に、たらたら、たらたらと一ひとしづく雫ずくずつ、血が落ちていと云うのである。

二十九

一人多い、その姫の影は朧おぼろでも、血のしたたりは現に見て、誰が目にも正まさしく留とどつた。

灯の影に地を探たづつて、穩おだやかならず、うそうそ搜さがしものをして歩ある行くのは、その血のあとを辿たどるのであろう。

消防夫しごとしにも、駕籠屋おんなにも、あえて怪我けがをしたらしいのではない。婦おんなたちにも様子は見えぬ。もつとも、南地第一の大事な市の列り立てば、些細ささいな疵きずなら、弱い舞妓まいきも我慢いまわして秘かくして退のけよう。

が、市に取とつては、上もなき可い忌まわしさで。

世話人は皆激しくひそ響んだ。

知らずや人々。お珊は既に、襟に秘かくし持った縫針で、裏を透とおして、左の手首の動脈を刺し貫いていたのである。

ただ、初はじめから不思議な血のあとを拾って、列を縫しらって検ゆべて行くと、静しずしず々と揃しずって練る時から、お珊の袴の影で留とどめたのを人を知った。

ここに休んでから、それとなく、五人目の姫の顔を差さしのぞくものもあつた。けれども端然としていた。黛まゆずみの他に玲れいろう瓏らうとして顔に一点の雲もなかつた。が、右めて手に捧たげた橘たちばなに見入るのであろう、寂さみしく目を閉じていたと云う。

時に、途中ではさもなかつた。ここに休む内に、怪しき氣のこ

と、点滴^{したた}る血の事、就^{なかんずく}中、姫の数の幻に一人多い事が、いつとなく、伝えられて、烈^{はげ}しく女どもの気を打った。

自然と、髪を垂れ、袖を合せて、床几なる姫は皆、斉^{ひと}しくお珊が臨終の姿と同じ、肩のさみしい風情となつた。

血だらけだ、血だらけだ、血だらけの稚児だ——と叫ぶ——柵の外の群集^{ぐんじゆ}の波を、鯨^{しやち}に追われて泳ぐがごとく、多一の顔が真^ま蒼^{つさお}に顯^{あらわ}れた。

「お呼びや、私をお知らせや。」

とお珊が云つた。

伝五爺^{じじい}は、懐を大きく、仰天した皺^{しわ}嗔^{がれ}声^{こえ}を振絞つて、

「多一か、多一はん——御寮人様はここじや。」と喚^{わめ}く。

早や柵の上を蹠^{よろ}躑^めき越えて、虚空を掴^{つか}んで探したのが、立直つて、衝と寄つた。

が、床几の前に、ぱったり倒れて、起直りざまの目の色は、口よりも血走つた。

「ああ、待^{まち}遠^どな、多一^おさん、」

と黒髪^{ゆら}揺ぐ、吐息^{といき}と共に、男の肩に手を掛けた。

「毒には加減をしたけれど、私が先へ死にそうでな、幾たび目をねむ^{ねむ}ったやろ。やっとここまで堪^{こら}えたえ。も一度顔を、と思うよつて……」

丸官の握^{にぎり}拳^{こぶし}が、時に、瓦^{かわら}の欠片^{かけら}のごとく、群集を打ちのめして掻^{かき}分^わける。

「傘でかくしておくれやす。や、」と云う。

台傘が颯と斜めになった。が、丸官の忿怒は遮り果てない。

靴足袋で青い足が、柵を踏んで乗ろうとするのを、一目見ると、懐中へ衝と手を入れて、両方へ振って、扱いて、投げた。既に袋を出ていた蛇は、二筋電のごとく光って飛んだ。

わ、と立騒ぐ群集の中へ、丸官の影は揉込まれた。一人渠のみならず、もの見高く、推掛った両側の千人は、一斉に動揺を立て、悲鳴を揚げて、泣く、叫ぶ。茶屋揚屋の軒に余つて、土足の泥波を店へ哄と……津波の余残は太左衛門橋、戒橋、相生橋に溢れかかり、畳屋町、笠屋町、玉屋町を横筋に渦巻き落ちる。

見よ、見よ、鴉おおが蔽おほいかかつて、人の目、頭かしらに、嘴はしを鳴らすを。
お珊おに詰寄る世話人は、また不思議にも、蛇が、蛇が、と遁にげま
惑どうた。その数はただ一ふたすじ条ではない。

屋台から舞妓が一人倒さかさまに落ちた。そこに、めらめらと鎌首を立
て、這いかかったためである。

それ、怪我人よ、人死ひとじによ、とそこもここも湧揚る。

お珊は、心静しずかに多一を抱いた。

「よう、顔見せておくれやす。」

「口惜くちおしい。御寮人、」と、血を吐きながら頭かぶりを振る。

「貴方あんたばかり殺しはせん。これお見やす、」と忘れたように、血
が涸かれて、蒼白あおしろんで、早や動かし得ぬ指を離すと、刻んだよう

に。しつかと持った、その脈を刺した手の橘の、からくれない鮮血に染ま
ったのが、重く多一の膝に落ちた。

男はしばらく凝視みつめていた。

「口惜い私こそ、……多一さん。女は世間に何にも出来ん。恋
し、愛いとしい事だけには、立派に我ままして見しよう。

宝市のこの服装なりで、大阪中の人の見る前で、貴方あんたの手を引いて

……なあ、見事丸官を蹴けて見しよう、と命をかけて思うたに。：

……先刻さつき蓋させる時も、押返して問うたもの、お珊、お前へ心中立
や、と一言いうてくれはらぬ。

一昨日おとといの芝居の難儀も、こうした内証があるよつて、私のため
に、堪こらえやはった辛抱やったら、一生にたった一度の、嬉しい思

いをしようもの、多一さん、貴下あんたは二十はたち。三つ上の姉で居て、何でこうまで迷うたやら、堪忍しておくれや。」

とて、はじめて、はらはらと落涙した。

絶入る耳に聞分けて、納得したか、一度ひとたびは領うなずいたが、

「私は、私は、御察人、生命いのちが惜おしいと申しません。可哀かわいげに、何で、何で、お美津を……」

と聞きも果さず……

「わあ、」と魂切たまぎる。

伝五爺じじいの胸おきを圧えて、

「人が立騒いで邪魔したら、撒散まきちらかいて払い退のきようと、お前に預けた、金貨銀貨が、その懐中ふところに沢山たんとある。不思議な事で、

使わいで済んだよつて、それもつて、な、えらい不足なやろけれど、不足、不足なやろけれど、……ああ、術ない、もう身がなえて声も出ぬ。

お聞きやす、多一さん、美津みいさんは、一所に連れずと、一人活いかいておきたかつた。貴方あんたと二人、人は交ぜず、死ぬのが私は本望なが、まだこの上、貴方にも美津さんにも、済まん事や思うたによつてな。

違ちがうたかえ、分わつたかえ、冥土めいどへ行いてかて、二人をば並べておく、……遣瀨やるせない、私の身にもなつてお見や。」

幽かすかながらに声は透とおる。

「多一さん、手を取つて……手を取つて……離さずと……——左

のこの手の動く方は、義理やあの娘この手をば私が引く。……さあ、三人で行こうな。」

と床几を離れて、すつくと立つ。身み動じろぎに乱るる黒髪。髻もとどりふつ、と真まん中なかから一ふた岐すじに颯さつとなる。半はんばを多た一いつに振掛けた、半はんばを握さつて捌さいたのを、翳かぎすばかりに、浪屋の二階を指さ磨まいた。

「おいでや、美津さんえ、……美津さんえ。」

練ものの列は疾とく、ばらばらに糸いとが断きれた。が、十一の姫ひめばかりは、さすが各目てんでに名を恥はじて、落ちたる市女笠、折れたる台傘、飛とびとびに、背せを潜ひそめ、顔おもてを蔽おおい、膝ひざを折敷おきなどしながらも、嵐のごとく、中の島籠こめた群集ぐんじゆが叫き喚うの凄すじまき中に、紅くれの袴はかま一人々々、点々として皆留とどまった。

と見ると、雲の黒き下に、次第に不知火しらぬいの消え行く光景ありさま。行方も分かぬ三人に、遠く遠く前途ゆくてを示す、それが光なき十一の緋の炎と見えた。

お珊は、幽かすかに、目も遙々はるばると、一人ずつ、その十一の燈ともを視びた。

明治四十五（一九一三）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十四卷」岩波書店

1942（昭和17）年3月10日発行

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

南地心中

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>